

CONTENTS

年頭に当たって－2016年 2
 石田 壽・鳥居久保・鈴木利明・村松 篤・水野豊秋・加藤幸治・中西修一

第3回 だれもが知ってる建築史のはなし
 計る 溝口正人 6

JIA 東海支部大会2015「都市の多生」 8
 谷村 茂・浅井裕雄・柳澤 力・竹中アシュ・近藤万記子

第32回 JIA 東海支部設計競技 2次審査結果 12
 「首相官邸」

- 一般の部 金賞 原 正彦
 銀賞 山田 寛・奥野智士・西田貫人・坪田一平
 銅賞 山田 寛・李 上
- 学生の部 金賞 中村純子・三屋皓紀・上奥璃奈
 銀賞 桐谷万奈人・川端一輝
 銅賞 前田真里・山田泰弘・牧田 光

<審査講評>西沢大良、南川祐輝、松浦健治郎、八木紀彰、山田浩史、吉村真基
 <審査経過>矢田義典 <記念講演会>牧ヒデアキ

愛知発 住宅研究会ツアー
 そうだ兵庫、行こう 笹野直之・齋藤正吉・塩田有紀・田中義彰 18

愛知発 住宅研究会 シンポジウム
 日本一フランス 土の建築交流企画「これからの時代、土の建築ができること」... 宇野勇治 19

地域会だより 19

保存情報170 旧山下郵便局 塚本隆典 20
 伊豆長岡の一日 山田正博 20

東海支部役員会報告 中西修一 21

Bulletin Board 22

2016年度 役員選挙結果 東海支部・愛知地域会 22

新年広告 23

編集後記 吉元 学・石川英樹 24

東海の集落 10

焼津市北東部、市街地から車で一〇分ほどのところに隠れ里の雰囲気を持つ三〇戸ほどの山間の集落がある。焼津市花沢の集落で、平成二六年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。静岡県唯一の保存地区である。奈良〜平安中期、東海道ができるまで使われていた旧東海道と呼ばれる街道沿いにある。山から流れ出る清流の花沢川沿いに街道が走り、その谷川の反対側の狭長な谷あいには集落が五〇〇メートル程線上に形成されている。傾斜地のため石垣を築いて屋敷地を造成し、土地を最大限利用するため道路際まで建物が建造されている。道路際の建物はこの地の産物である蜜柑やお茶の貯蔵庫、作業道具置場となっていたそうだ。集落の何軒かの道路際建物は長屋門となっており、その奥は住宅の庭になっている。緻密に築かれた石垣の上部の建物は下見板張り、江戸から明治のものとのこと。谷川対岸から枝葉をのびす樹木に覆われたうねる街道の曲線と石垣、下見板の美しい集落である。市街地に近い場所に、このような山深い秘境の雰囲気のある集落があることが以外でもある。



街道沿いの建物のひとつで、二階部分を廊下でつなぎ、その下から奥の庭へと通じている。かつては集落周辺の傾斜地一面蜜柑畑だったほど蜜柑栽培が盛んで、農作業や貯蔵のための付属屋を狭い谷あいには建てるため、街道ぎりぎりまで敷地を利用した工夫が感じられる

生津康広
 生津建築設計室アーキハウス



■年頭に当たって— 2016年

2015年を振り返って、 今後なすべきことは

東海支部長

石田 壽



東海支部の皆様、新年明けましておめでとうございます。年頭に当たり皆様のご多幸とご繁栄を心よりお祈り申し上げます。

2015年は、'20東京オリンピック新国立競技場を巡る問題が紙面を賑わせ、国民的議論となりました。この問題について、JIAのスタンスは反対・賛成ではなく、コンペの経緯と審査の問題、国民に対する透明性と情報公開を行うよう要請するものでした。7月には会長より「JIAの提言」がプレス発表されました。安倍首相の白紙撤回後も、JIAは新たな公募型プロポーザルに注視し、提案内容の公開とデザインアドバイスメカニズムの設置を要望しています。

また、改正公共工事品質確保促進法の施行に伴い、公共事業に関して設計施工一括方式やECIをはじめとする多様な発注方式の導入が加速されています。それについては、公共建築を良質な社会資本として整備するために、私たちJIAはどうするのか考えていく必要があります。

さらに、10月には杭の施工データ改ざんが発覚し、杭業界全体に拡大しています。今や建築業界全体の構造的な問題にまで発展し、建物の安全性に対する信頼の根本にかかわる問題であり、安全性への影響如何にかかわらず、社会に与える衝撃は大きいと言えます。

このように建築をとりまく環境が厳しく、また大きく変化している中、建築家の社会的役割を再確認し市民社会に認知されることが、今最重要課題ではないでしょうか。

そうした中、JIAでは昨年の通常総会において会員規程が改正され、正会員は全て登録建築家になることが決まりました。7月には、建築家資格制度規則・同細則、CPD規則・同細則の改正も理事会承認されました。支部では、昨年9月に会員集会を開催し周知を図りましたが、登録のための手続きなどの詳細が中々決まらず、やっと12月にお知らせすることができました。今後は、できるだけ早く登録を促し、正会員と登録建築家の整合性を図っていきたいと思います。

さて、東海支部の事業としては、11月に東海支部大会を愛知地域会の主管で名古屋で開催しました。テーマは「都市の多生（名古屋の成り立ちとこれから）」とし、「海空ツアー」で中川運河・堀川・名古屋城を巡り、新たな発見をし、内藤廣氏を講師に迎えた基調講演・シンポジウムと、都市の多生のあり方を探る意義のある大会となりました。11月末には、持出し役員会を兼ね岐阜にて「みんなの森ぎふメディ

アコスモス」見学会・伊東豊雄氏講演会を開催しました。まれにみる盛況さで伊東氏の魅力を垣間見るものでした。9月には、JIA建築家大会2015が金沢にて「みんな力（ともに在る社会へ）」のテーマで開催され、そのシンポジウムの1つに「子供×建築（建築と子供たちネットワーク）」を東海支部「子どもの建築学校委員会」が主管しました。子ども向け建築教育の研究・実践、ネットワーク会議の基盤構築に向けて、大いに寄与できたのではないのでしょうか。また、「第22回東海学生卒業設計コンクール」、「第32回JIA東海支部設計競技」が実施され、支部の活動の歴史を感じさせるものでした。「JIA東海住宅建築賞」は第3回となり、継続的な支部事業になりつつあります。これからの展開が楽しみな若手建築家の目標ともなる活動となっています。各事業の継続と発展は、事業に携わる支部の皆さんのおかげと感謝に耐えません。

今年度、懸案である支部財政の健全化を図る上で、固定費の削減、事業の見直しを実施しました。事務局家賃の軽減、支部機関誌「ARCHITECT」の印刷編集費の削減、交通費の見直しなど、かなりの支出の削減を実行できました。ただ、支部の財政が地域会・協力会の負担により成り立っている現状は打開できていません。全国会議に基づく支部事業の拡大、また会員減少も考えると、支部会費を徴収する必要があります。新会員制度に基づく会員増強を図ることも含め、今年度中に方向性を見極めるために、現在検討中の支部の重要な課題となっています。

昨年、「JIA基本政策諮問会議答申書」を受けて、JIAアクションプラン策定特別委員会が設置され、「建築家とは」「JIAのあり方、存在意義、今後」についての検討を開始しています。中長期ビジョンを意識しつつ、短中期の方針を出すために、次代を担う若い人を中心に議論を進めているところです。JIAの舵取りを皆で考えていく必要があります。

支部・地域会の活動がJIAの基盤であり、これからも「会員にとって魅力のある、分かりやすいJIA」「地域に根ざした活動、社会に貢献できるJIA」を目指して支部運営を考えていきたいと思ひます。皆さんの更なるご協力を必要としています。

今年もよろしくお祈りします。

2016年の 年頭に際して

本部理事

鳥居久保



会員の皆さま、協力会員の皆さま、新年あけましておめでとうございます。

昨年、たびたび世間をにぎわせた新国立競技場白紙撤回やオリンピック施設建設に関するニュースは、設計と施工がジョイントされた発注形態がいつの間にか既成事実化され、公共入札の基本から外れていることは不問に付し、「撤回」や「金額の多寡」にだけ焦点が当たって大きく報道されておりました。

本来設計者と施工者による設計段階からのコラボレーションは、公共の場合、緻密な判断に基づいて初めて実現可能になるはずですが、今回東京都や国から発せられたデザインビルドは従来からの公共工事の枠組みをあえて破って、これまでとは違う建築生産のフェーズを披歴しました。この件は東京都や国だけの問題に留まらず、他の自治体も追随する可能性を孕み、それは今後建築家の立場と役割を確実に変化させるものと言えます。

一方、JIAの登録建築家制度は旧来のダブルスタンダードを是正すべく、正会員の登録建築家を強く推し進めることとなりました。これについては運営上の難しさを伴いつつも、会員規程に明文化されたいわゆる「正会員＝登録建築家」の中にJIA28年の悲願が詰まっている、と言っても過言ではありません。われわれの先達が希求した職能性をJIAに内部化し、理念を損なわずにどう現実に着地できるか、試行錯誤の中でのひとまずの結果だったろうと思います。

しかし「東京オリンピック」で表面化したように建築生産の現場が大きく変わろうとしている今、建築家はその職能を単純化して旧来の理念だけで押し切るのか、はたまた複雑化した社会に呼応する形で時代性に細かく対応しながら基準を書き変えていくのか、判断が求められているところではあります。

2016年を迎えるにあたり、われわれ建築家は目の前に広がる時代的変化に向き合いながら、支部、地域会での議論の上にはっきりと立ってJIAをつくり上げるべき時だと思います。社会から信頼される建築家として、開かれたフィールドで市民と連携を取りながら幅広い活動を展開していくためにも、以前にも増して皆さまには一層のご協力をお願いいたしまして年頭のご挨拶に代えたいと思います。

本年もどうぞよろしくお願いたします。

改めて建築「気質」が 問われる時に

本部理事

鈴木利明



新年明けましておめでとうございます。

もとより地域密着を身上とする私ですが、本部理事としての新年ご挨拶ですので、JIA 総論的なお話とさせていただきます。

昨秋以来、横浜のマンション杭工事改ざん問題が世の耳目を集め、建築界を揺るがす疑心暗鬼が横行しています。私自身も同様のマンション団地事業の設計・監修の実務を名古屋で2件経験しましたが、やはり、開発理念・許認可協議・基本設計のFIXの後は設計施工一貫体制で、実施設計と工事監理は定例的監修参画のみでした。設計監理を完遂できなくとも、入居前後のきめ細かく迅速な顧客サービス一貫性を最重視との事業マインドは一定理解していました。杭データ改ざん自体への設計者からの抑止力発揮の方策議論は、実はとても当惑しています。

思い返せば10年前の「姉歯事件」はより直撃的な衝撃でした。設計組織の管理職の身の心身にずしりと堪える空前の大事件で、設計者が天性として持つべき良心・責任・誇りを根底から覆す信じられない事態に、私たちの活動基盤たる社会的信頼や尊厳の念は著しく失墜しました。結果、性悪説に転じた「厳格」審査や煩雑手続が重層化され、実務的にも重大苦難に陥ったのです。ここ数年、某大学のM1生向けの非常勤で担当の「建築業務論」では例年、「姉歯事件が提起したもの」を第1講としています。

この新年ご挨拶の標題として「建築家職能」を大上段に掲げるには自身としてもさまざまな躊躇があり、今回の改ざん問題はいわば、社会資産たる建築に関わる総ての人本来の「気質（かたぎ）」の蘇生を喚起すべき時というのが素直な実感です。責任のなすり合いや再発防止手続の「厳格化」では無力感が否めません。

ご承知のように、私たちの職務実践基盤たる「建築基準法」の法体系は、根幹である安心・安全を確保する最低基準を示す域を出ないのですが、各業種でそれすら偽装してすり抜けるような不心得が続発している悲しい現実があります。今や、本来は要らぬお節介でも、建築に関わる総ての者の「気質」を高らかにうたい上げた初心回帰の「建築基本法」の出番なのかも知れません。

その理念の率先垂範の重責に邁進するのが「建築家」の職能とあらためて心得る新年、微力でも一步一步前進したい所存です。

本年もどうぞよろしくお願いたします。

「魅力ある JIA とは？」 今後も考え続けていく

静岡地域会長
村松 篤



本来ならば新年のご挨拶をさせていただくところですが、昨年の暮れに父が他界したため控えさせていただきます。

昨年はこれまで走り続けてきた事業活動を少し見直し、腰を据えた計画のもと着実に事業を進めて参りました。JIA静岡の発展のためとはいえ、静岡地域会の役員をはじめ会員の皆さま方のご協力があったからこそ遂行することができたのではないかと考えています。本当にありがとうございました。

振り返れば、昨年2月には静岡県建築文化研究会主催による建築家講演会（伊礼智氏：設計の標準化から生まれる住まい）とJIA静岡東部持出しによる東海支部役員会（プラザヴェルデ：長谷川逸子氏設計）&建築ウォッチング（沼津御用邸記念公園）を、4月には静岡地域会2015年度通常総会&建築家講演会（泉幸甫氏：手作りと工業化の狭間で建築を考える）、6月にはJIA静岡西部持出し役員会&プロフェッショナル講演会（水澤工務店・川嶋健史氏：水澤工務店100年の仕事と松韻亭の建築を振り返って）・建築ウォッチング（浜松市松韻亭：谷口吉生氏設計）、7月には前年に引き続き1泊2日の建築ウォッチング（世界遺産・富岡製紙場と上州の名建築をめぐる）、8月にはJIA塾（床材・各種防水工法について）、10月には建築・歴史文化・景観にスポットを当てた「ものづくりフェア（沼津・三島会場：建築作品展示、建築ウォッチング、講演会、まち歩き）」を、それぞれ開催しました。私なりに多少ブレキを掛け事業活動をセーブしてきたつもりでしたが、結果的には相当数のものを実施することになり、担当の委員長をはじめ関係者には大変なご苦勞をお掛けしたことを思います。

来年度は次期会長にバトンを渡していくこととなりますが、これまで成しえなかった市民と行政をつなぐ仕掛けや会員参加による運営のあり方、会員増強のためのアイデアについては、喫緊の課題として取り組まれることを期待しています。一方で、頭の片隅に置いてきた魅力あるJIAとは何なのかについては、立場は変わりますが自問自答しながら考え続けていく所存です。

この2年間、皆さま方には大変お世話になりました。なかでも未熟な私を陰で支えてくれた尾林運営局長には、この場をお借りしてお礼を申し上げさせていただきます。どうもありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。

みんなで進もう 社会に受け入れられる JIA へ

愛知地域会長
水野 豊秋



新年あけましておめでとうございます。支部会員の皆さまには日ごろのJIA活動へのご協力に感謝申し上げます。

早いもので地域会長職の任期も残すところ数カ月となりました。目標に掲げた組織（委員会）改革や会員増強、財政改革の実現は簡単にはまいりませんが、残り任期も努力を続けると共に、来年度につなげていきたいと思えます。

昨年11月には「都市の多生」「名古屋の成り立ち・これから」と題し、名古屋TV塔にて支部大会が愛知地域会主幹で開催され、152名と多数の参加をいただき成功裏に終えることができました。大会実行委員会の皆さまのご尽力に感謝申し上げます。

そのほか長者町えびす祭りにおいての「建築家フェスティバル」・長久手市での「なでラボ」・豊橋市での「sebone」・猪高小学校での「トワイライトスクール」などでダンボールカード・紙コップを使っての建築教室が連続的に開催されました。また素材を訪ねる旅、天使の森+環境セミナー、INAXライブミュージアムなどの見学会の開催、住宅研究会では連続環境セミナースタートアップセミナー1・2・3をはじめ数々の講演会や、全国住宅部会全国会議の開催、近畿支部との建築ツアー交流、JIA愛知・賛助会主催のCPD研修、等々事業を行ってまいりました、年明けには「モンスタークライアントとのトラブルに備えて」と題した弁護士による講演会が開催されます。ご協力ありがとうございました。

また資格制度改革も行われました。2013年6月に芦原会長から「JIA正会員ルート」の提案がなされました。2年間の検討作業、各地での会員集会などを経て、昨年の通常総会において会員規定が改正され、正会員は全員登録建築家になることが決まりました。これを受け10月1日から建築家資格制度規則、同細則、継続職能研修（CPD）規則、同細則の改定も行われました。12月から始まる「登録建築家」登録申請では登録審査料や再登録に必要な単位数などの減免措置が検討されています。これから支部・地域会でも周知していかなければなりません。しかしながら制度設計に明け暮れ「職能の確立に向けた運動」という根本を見失わないようにしていかなければいけない、との思いが募ります。会員増強、財政の問題など解消しなければならない問題は山積していますが、ともに乗り越えていきましょう。本年も会員の皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

建築界と教育界が目指す中、 JIAのこれからの体制を どうするか

岐阜地域会長
加藤 幸治



新年あけましておめでとうございます。新年を迎えるに当たり、会員の皆さまのご多幸を祈念いたします。また、JIA活動への皆さまのご協力に感謝を申し上げます。

さて、2005年に耐震計算書偽装事件があり、建築界そして社会に大きな影響を与えたことは皆さまもご記憶があると思います。最近、杭施工データの偽装が発覚し、杭工事業界やゼネコンに大きな影響を与えている現状です。また、社会問題として空き家が各地域で問題となっています。私の住んでいる市では40年経過した団地があり、後継者が戻らない空き家があります。今後、設計・監理するJIAの会員として注視していく必要があるのではないのでしょうか。

JIAの課題として、芦原会長の方針で、JIA正会員が登録建築家になることは、当初から抱えていた問題で長い間議論されてきましたが難題です。私事ですが、教育界では学生の人口減少が問題になっており、これをどう打開していくのかは、大学経営者が抱えている課題です。教育もJABEE（日本技術者教育認定機構）は、UNESCO-UIAの継続加盟申請を行わず認証が終了し、ワシントン協定加盟団体は維持しながら2014年にキャンベラ協定に暫定加盟をし、2015年には正式加盟に向けて活動しています。認定された各大学、大学院、高専も日本の若い技術者として海外で活躍できる学生を卒業させています。

また最近、公共建築の入札や公募型プロポーザルは評価基準で、受注することになります。その一つとして、技術・業務実績・建築CPDなどにより点数で第一次審査され、二次審査に移行の上決定されますが担当技術者が公益財団法人建築技術教育普及センターのCPD認定プログラムを取得されていると加点されます。これからJIA会員の皆さんが設計に携わっていく中、思わぬことから責任とクレームによる訴訟も多くなっていくことが予想されると考えます。岐阜地域会を含め、もう一度会員の皆さんと共にいろいろな角度から見直しをしていく時期と考えます。そして、消費税とマイナンバー制度も開始され2016年度は、多くの課題を抱えていく年でもあります。

最後に、本年も会員の皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

より外部に開かれた 地域会へ

三重地域会長
中西 修一



あけましておめでとうございます。

昨年度、地域会長を仰せつかり、2年任期の終盤を迎え、あと一息というところまで来ることができました。自らの力不足は常を感じるころではありますが、地域会員の皆さんをはじめ、関係の方々には大変お世話になり本当に感謝しています。

昨年度から、より外部へ開かれた地域会をという思いを込めつつ新規事業を枠取りし、皆さんとともに事業を企画してきました。その事業が「建築ラリー」という形で実を結び、間もなく始まるようとしています。この原稿を書いている段階では、まだ申込み状況も分かりませんが多くの方にご参加いただけることを願っています。

その他のことを少し振り返りたいと思います。他会との連携という面では少し前進できました。ちょうど1年ほど前、「建築士法の改正」を受け、「業務報酬基準に準拠した契約の締結の徹底」に関して建築士会、建築士事務所協会と3会で、三重県のほか6市を訪問し、要望・意見交換の場を持ちました。また、「士法改正に関する講習会」も共催し、さらに今年度は、防災面でも3会の集まりを持ち協議しました。各会とも会員減少の悩みを抱えている中でお互いの立場を尊重しつつ、緩やかに連携していくことは大切なことだと感じています。会員増強の面ですが準会員、学生会員、法人協力会員が仲間として増えたことは本当に嬉しいことです。しかし、正会員の入会をはじめ、まだまだ思うように事が進んでいないのが現状です。今後も日々の皆さんのつながりなどの中で「この方を！」と思う方に声掛けしていただき、会員数が充実されていくことを願っています。

また、今後を見据えたときに財政の問題をはじめ、乗り越えなければならない壁は少なくありません。事業面ではより効率的で効果的な事業の企画が求められることでしょうか。さらには全体を見通して大幅な改革が必要になってくるかもしれません。

これからも皆で知恵を出し合い、JIAがそして皆さんがよりよい方向に向かっていくことを願っています。

今年もよろしく申し上げます。

計る

溝口正人 | 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授

私のパソコンの漢字変換ソフトウェアによれば、「計る」とは「数量や時間を調べ数える。また、試み企てる。計算、計量、計画、計略」とあります。計画、設計、矩計、「計」ることは建築設計の根幹にある。量ることも「調べる」ことですから、「数える」点が計ることの大きな違いといえます。建築がいかに「計ってきたか」、あるいは「計ってこなかったか」が、今回のテーマです。

数を計る

このアングルで写真を撮ったのは何枚目でしょうか(※図1)。左手前の東京海上(日動)ビルは、われわれの世代では忘れられない建物。31mラインでそろう皇居前の景観に、「この高さは許されるのか。皇居を見下ろすことがそもそもけしからん」みたいな議論があった。結果、高さを減じて実現したのではなかったかと記憶しています。現状はこの通り。まわりのスレンダーなビルに埋もれて、今となってはズンズンとした印象は否めません。生みの親であり、建築家の良心の塊とされた前川国男は天国でどのような思いなのでしょう。

是非を論じているわけではありません。ルールは必須ですが、時代の都合で変わる。スポーツにも通ずるものです。丸の内は、そもそも大名屋敷の跡地で練兵場の野原となっていた土地ですから、あるべき姿は過去にはない。時代時代のルールが、丸の内には必要だったといえます。東京海上ビルは、新たな時代を計れなかった。外苑の時代を計らずして新国立競技場は、舞台上上がることはできません。発表された新たな案はどうでしょう。

マンハッタンのはなしはアメリカの経済力を物語るものといえますし、高く高く建ちあがるエネルギーを押さえるべくゾーニング法が生まれ、特徴的なビル群が形成されました。日本の現行法規のもとでも建物は様々に形を変えます。しかし数を重ねると、時には見えないルールを可視化する。そんな役割を建築は演じるようです。日々景観を変えていく名古屋駅周辺のビルたちは(※図2)、どのようなルールを可視化するのでしょうか。

数で計る

目に見えない小さな粒子に質量があるかどうか、それが宇宙のあり方で決定的な意味を持つことで昨年は盛り上がりました。こうでなければ説明が付かない、さまざまな事象を体系の中で説明したい、把握したいという欲求は、対象や時代の相違を越えて、人間が持つ根源的な欲求です。建築の分野を生業とする人間が、体系立てて物事を把握したいと考えるのは今も昔も変わりません。

建築の場合、建物各部を比例で数値化して体系立てようという考えは、洋の東西を問わず共通した考えです。古典的な設計術は「数量を調べ数え、試み企てる」こと。まさに「計る」ことにあると言えるでしょう。西洋の古典建築は、ウィトルウィウス以来の形式性をいかに比例で精緻に組み立てるかが、美を約束する唯一の手立てであり、設計のすべてで



図1 | 皇居外苑から見た丸の内の景観



図2 | 名古屋駅前の景観 (2015.6時点)

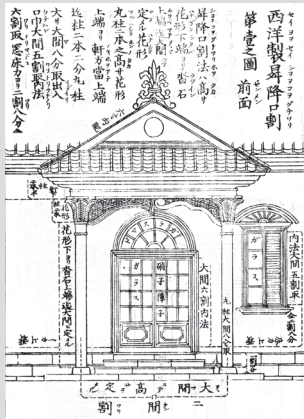


図3 | 明治の技術書にみる木割化された洋風建築



図4 | 修理可能なことは、時間で計る上で重要なポイント

あったともいえます。日本における木割も計ることの典型でしょう。規則性により比例化された部分の集積で美が約束される。形は数で計れるのであり、数で計れない形に美は存在しないのです。

一見怪しげな意匠の明治の擬洋風建築でさえも、この思想は徹底されています。グラバーは、西洋的な素養もない日本の大工が、簡単な図を見せただけでグラバー邸をつくり上げた驚きを日記に記していますが、建築を数で計れるのは大工のお手の物。擬洋風建築でさえ、明治半ばには数で計れる建築として木割書に組み込まれました(※図3)。数で計ることの汎用性を示しています。

時間を計る

すでに現前にある美しい建築をいかに確実に再生産するか、そのための方法はなにか、それが時間を計る前近代の設計の論理でした。美しい過去の積み重ねが未来へとつながるという考えです。一方、近代主義は、過去を美しいものとして描きませんでした。参照すべきは現在であり、美しいものは予想される未来にあるとしました。結果、さまざまな主義主張や計画が浮かんでは消えました。今がなくて将来があるか、今だけのことを考えていたら将来があるか。議論は堂々巡りとなりますが、少なくとも過去に学ばずして未来はないのでしょうか。

文化財建造物や町並みの保存にかかわる建築史研究者に求められる重要なスキルが、建物の年代判定とそれを踏まえた価値付けです。建築史研究者は骨董屋として目利きでなければなりません。古いものだから保存すべきだと、雑ばくに論じる学者さんもないわけではありませんが、優秀

な骨董屋とはいえませんから、そこで掴まされるのは紛い物である可能性は高い。必要とされるのは、残すべき価値がどこにあるかであって、古いから良いわけではない。ですから文化財の評価は、時間を計ることにあると考えています。ウブな建物も良いけれど、古建築たちは、年齢相応の魅力があります。時代の評価に耐えてきた建物たちには数で表されるモノのかたちの意味がある。かたちの意味を知ること、その背後に蓄積された時間を計ることでもあります。

時間で計る

新築のときがもっともきれいで、あとは崩壊が進むだけと現代建築を揶揄する声も聞こえてきますが、いずれにせよ、近代では時間で計ることが禁忌とされ、その考え方が再考されているのが現代ということになるのでしょうか。メタボリズムは、時間で計ることの可能性を示してくれました。しかし中銀カプセルタワービルはコトとしての未来的中させましたが、モノとしての未来は予見できませんでした。時代の変化に耐えうる建築を生み出すこと、時間で計ることの困難さを知ります。

耐震、機能、省エネ。生真面目に対応していたら、建物も長生きはできません。柳に風折れなし。のらりくらりとやり過ごすことが長生きのコツ(※図4)。マッカーサーのスピーチではありませんが、自らの義務を果たして一介の老兵として消え、記憶の中に留まることも、建物のひとつの選択肢だといえます。時間で計り得るのが名建築なのだといえるかもしれません。

「計る」ことの意味は再評価されて良い。実測至上主義の歴史屋の手前味噌な結論に至ったところで誌面が尽きました。研究にせよ、設計にせよ、計画通りに進む試しはありません。「計る」ことが、現在の私に最も欠けているようにも思えてきますが、「計る」ことで尽きないのが人生だと達観し、新年を迎えることとしましょう。



みぞぐち・まさと | 1960年三重県生まれ。名古屋大学卒、同大学院修了。清水建設設計本部、名古屋大学助手を経て現職。専門は日本住宅史、漢族・少数民族住居誌。文科省文化財保護審議会第二専門調査会委員、愛知県文化財保護審議会委員、重要伝統的建造物群保存地区保存審議会委員(妻籠、奈良井、足助など)。町並調査(美濃、醒井、犬山、足助、有松、揖斐川など)、近代化遺産調査(秋田、鳥取、愛知)、名古屋城本丸御殿・湖西市新居関の復元などに従事。写真はヤオ族の子どもとともに。

JIA 東海支部大会 2015 都市の多生

名古屋の成り立ち・これから

1日目 | 11月13日 (金)

- 10:30~15:30 海空ツアー
会場：中川運河・堀川/名古屋城
- 16:00~17:00 基調講演
テーマ：「時間から考える都市計画」・
内藤廣氏
会場：名古屋テレビ塔4F
ザ・パークバンケット
- 17:05~19:20 シンポジウム
パネリスト：内藤廣氏（建築家）、
涌井史郎氏（造園家・岐阜県
立森林アカデミー学長）、
瀬口哲夫氏
（名古屋市立大学名誉教授）
コーディネーター：竹中克之氏
（愛知県立大学教授）
会場：名古屋テレビ塔4F
ザ・パークバンケット
- 19:50~21:15 レセプション
会場：名古屋テレビ塔4F
ザ・パークバンケット

2日目 | 11月14日 (土)

- 12:30~17:00
JIA 東海支部設計競技2次審査
テーマ：「首相官邸」
（※詳しくはp12から）



大会を振り返って

大会委員長 谷村 茂



1年かけて準備してきた支部大会は盛況のうちに終わりました。終わってみれば、反省点も明確になってくるのですが、祭りの最中はなかなか難しいものがあります。

実行委員会では、当初から名古屋の独自性をいかにして出すかで議論が白熱しました。早い段階で「中川運河・堀川」「名古屋城」を取り上げることは固まったのですが、講師の選択と全体のシナリオ作りは夏が終わるまで擦った揉んだしていたのが実情です。

時代小説での江戸の堀ほどには描かれていない堀川ですが、徳川宗春の頃はかなりにぎわっていたようですし、大正時代に工事着手された中川運河にしても当時は東洋一の運河だったようです。現在は、護岸の一部を親水区域へと整備する運河再生計画が動きつつあるようです。一方、名古屋城は、本丸御殿の2期工事もほぼ終わり、二之丸庭園の再生も徐々に動き出しています。これらの遺産に、現代の放送文化を担ってきた名古屋TV塔を加えた土木・建築遺産へスポットライトを当てることで、市民が親しめる新たな空間へと再生される問題提起になれば、と考えました。

大会は前半の「海空ツアー」と後半の「基調講演・シンポジウム」の2部構成としました。運河をめぐる屋形船の定員が40名のため、最後まで人数が集まるかの不安がありました。幸い、ほぼ定員に近い参加者が集まりました。名古屋城で普段見られない西北隅櫓、乃木倉庫と二之丸庭園の遺構を見てから後半の会場となるTV塔へ移動しました。

久しぶりで聞く内藤さんの基調講演は、時間を題材に「意志と多様性」を論じて、次に続くシンポジウムへと導いていただきました。コーディネーターの竹中先生にはぶっつけ本番で、3人のパネリストとの十分な打ち合わせ時間が無くご迷惑を掛けましたが、涌井先生、瀬口先生といった重鎮の意見を引き出して楽しいセッションとなりました。

最後に、実行委員長以下、委員の皆さんの行動力に感謝すると共に、参加していただいた法人協会の皆さまの協力に大会委員長としてお礼を申し上げたいと思います。

大会実行委員長 浅井裕雄



昨今の今頃、支部大会の実行委員長を指名され、あれから1年、素晴らしい実行委員の方々が集まり盛大に終われたこと、まずは委員の皆さまに御礼申し上げます。

人が営む都市とは何だろう。莫大な費用や労力をかけたインフラの上に都市は成長し続けるのですが、多くのモノが残されてゆきます。それらを「多生」という観点から考えてみようというのが今回のテーマです。名古屋をいろいろな角度から見て、そして都市を考える。地域の建築家とそんな大会ができれば、意義あるものになると思います、そんな支部大会を目指しました。

朝、名古屋港に集合。ボートに乗船し、中川運河・堀川の低い視点から名古屋の裏側を眺めてインフラや環境を見つめました。続いて名古屋城へ。当初は石垣の改修現場の見学を企画していたのですが、条件が合わず断念。歴史的な土木工法ともいえる技術を学びたかった。

支部大会の会場は名古屋TV塔。電波塔としての役割も終え、名古屋のシンボルです。最初に内藤さんの講演、続くシンポジウムは車座のように、4人の講師陣を囲んで参加者みんなで都市をさまざまな観点から考えることができました。翌日はJIA 東海支部設計競技の審査、支部大会非公式となってしまいましたが、あびす祭りのダンボールカードを使ったイベントと、日ごろの活動も感じていただこうと2日の日程で開催しました。多くの方にご参加いただき感謝申し上げます。

最後に、瀬口先生に中川運河はどうするのがいいのでしょうかと聞いてみたら、「残しておけば、いつか役に立つ」と言われました。長い時間かけて思いを積み上げて置いておくのもいいのかも。

中川運河・堀川・名古屋城を巡る

海に揉まれる屋形船2艘が朝の名古屋港を出航した。中部経済を今も支えるダイナミックな港と、目の前の美味しそうな料理を同時に眺めつつ、船は中川運河へ舵を切る。2カ所の扉に挟まれた水位調節ロック(閘門)に船が収まるとピタッと揺れは無くなり、水面とともにとんとん下がっていく。

時間を遡ること半年前、この運河クルーズ・TV塔・内藤さん基調講演の3点は先行して決まり、支部大会の出発点となった。潮の干満の関係でスケジュール的にもツアーが講演会より前、つまり実際の出発点にもなった。後からつくった真面目な主旨は前記事に依るが、都市の隙間から普段とは違う角度で都市を体験し楽しもう、との魂胆が正直な暴露話である。

しかし、隙間は予想を上回る。運河の歴史を知り尽くす講師の瀬口先生をして「橋を裏側から見ると名前がわからない」。中川でアートイベントを仕掛ける案内役の藤田氏は「中川はとにかく鏡、上下に同じ景色が映る」と。TV塔会場で放映した映像『名古屋静脈』が上下逆さまに映されていたことをご存

知だろうか。なぜか空側で魚が跳ねるシーンがなければ気づきにくい。天橋立は股のぞきで有名だが、物理的に見方や立場を変えるきっかけはいろいろな所に潜んでいる。

話を戻そう。ロックを過ぎると、中川運河loveな藤田氏と内田氏の熱い解説に花が咲き、水面に浮かぶイベント会場を通過、小栗康平監督の映画『泥の河(S56)』の舞台だった小栗橋付近の倉庫群まで遡上する。しかし、運河でイベントをするには両岸も含め市の所有のため、申請が12カ所におよび大変らしい。瀬口先生は、空き地だらけの両岸を民間に売れば、その費用で木造の名古屋城天守を一個買えるのではないかと試算。都市が硬直化する要因は全くもってさまざまだ。

残念な事にささしまライブまでは行けず、改築中の露橋水処理センターで折り返す。産業としての機能は終えるも、調整池や下水放流ルートとして都市の裏方を今でも支え、名駅に近い一部は再生が進む。文化的な何かに興りつつある匂いがし、講師の竹中先生による空間コードも新たな発掘だ。食事をしながら港まで一旦戻り、堀川へと舵を切る。

名古屋城築城時に造られた堀川は、中川と対象的に両岸は当時から民間所有とのこと。各所有者が護岸を築いたため多様性があったが、石プリント柄のPC壁改修により均一で無機質な側溝に再生中。400年間、那古野台地の人工排水路として機能し、産業だけでなく花見や伝統的な祭りの舞台にもなってきた素敵な場所なのに大変残念である。歴史loveな瀬口先生が熱く吠えておられた。

講師陣の刺激的な名調子で有意義に船は進み、開削時の終点朝日橋に到着、三之丸幅下門跡を抜け名古屋城に登城する。空からの意味はTV塔なのだが、ツアーでも非公開の北西隅櫓に登り、ちょっぴり空からを味わう。他にお堀に降りての石垣修復現場と、発掘調査中の二の丸庭園を見たかったが、工事の関係で叶わず。非公開の乃木倉庫などを加えることでツアーを終了した。

天守閣やTV塔をどう再生するのか、JIAから声を出せることは国立競技場に限らず多い気がする。空襲で象徴的になり焼け落ちた全国の天守閣。コソゴソでは真っ先に相手のまちの中心の教会と橋が壊され、復旧も真っ先にそこから行われたという。「懐古復元だけではなく、どう使うか戦略が必要(内藤廣)」との言葉も印象深い。

最後に。ツアーで良く話題に出たのが、昭和始めに竣工した中川運河でさえ、見事に成長した木々による景観である。「造園は未来の姿を設計する(涌井先生)」、「二の丸庭園発掘のため一部伐採せざるを得なかった(瀬口先生)」などの発言も考えさせられる。長い時間軸の中で『生態系の多生』も当然ながら都市に含まれるのである。



織田信長号 船内の様子 (撮影者・中澤)



源頼朝号 堀川堀留(朝日橋)にて (撮影者・牧)



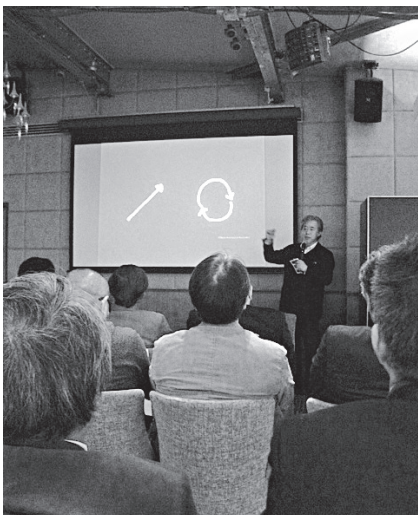
本丸側に窓の無い、名古屋城西北隅櫓(国・重文) (撮影者・中澤)

柳澤 力 |
柳澤力一級建築士事務所

内藤廣 「時間から考える都市計画」

どこから話を書けばいいだろう。内藤さんの話は、方向性はあるものの始まる場所が一定していない。周りから柔らかく進めていながらも最終的にはそこにいる人たちに、自分で物事を考えさせるように持っていく。講演としてスライドや話は進めていただきながらも何かのきっかけをつくってしまう人のように思う。その特性が狙われているのか、いつでもどこでも忙しくてコンタクトが取れない。この日も後に竹中克行先生をコーディネーターとしたシンポジウムがあったが、内藤さんが何について話をするかほとんど知らない状態でことは始まった。始まるまで周囲を悩ませはしたが、終わった今となってはそれはどうでも良いことのように思う。少し大げさかもしれないが、名古屋が変わっていくきっかけがここからできていくように思っている。

時間の感覚には2つの種類があるという。直線的に進み永遠を感じさせる西洋的な進み方と輪を描き循環的に進む東洋的な進み方で、日本にはその2つが同居しているらしい。これらは読み替えが可能で、直線的なそれを意思とすれば循環す



直線と循環の図で説明する内藤さん

るそれを多様性とも捉えることができる。意思は持続し力強いものだ。男性的とも言える一方で近場は見えてないかもしれない。多様性は柔軟に全てを受け入れる、身近な幸せといってもいいような日常に必要なものだ。女性的にとらえることもできるのかもしれない。名古屋で置き換えれば会場となったテレビ塔は復興のシンボルであり、それを意思とすることができよう。循環するそれは住宅であったり商店であったりまち自体と置き換えることができると思う。まちは変わりながら持続するものとして、電波塔として機能を失ったシンボルを私たちはこれからどうしようか。同時にレプリカの城も、短時間での再建しか考えない方向性は正すべきではないだろうか。

バンダアアチェというスマトラ地震で多くの犠牲を出した場所がある。スマトラ全体で28万人の人が津波で亡くなった。恐ろしく破壊的な出来事があったにもかかわらず海に防潮堤などはあまりつくられていないらしい。住宅の高台移転は人が住まず失敗したようだ。高い所は安全だし理論は正しいのかもしれない。でも人ってそれだけで動けるわけでもない。被災したその地には今や元のように家が立ち並んでいるという。災害への対策を考えることは重要だけど、リアリティから乖離したそれは残念ながら意味も価値も持たなくなってしまう。身近な環境で生きて行くしかない人々にとって災害対策とは何だろうと考えた。いつ起きるかわからない災害に対し、そのときの経済だけで解決して良いものではないだろう。自然の脅威を前に私たちは無力かもしれないが、教訓を得て細々と生きていくのも私たちの姿である。話は三陸の今

と結びつく。大規模な開発にどこまでの意味があるだろうか。私たちは空間ではなく時間を設計すべきだろう。

渋谷の再開発の話もあった。そこは若い人が次々と集まってくる場所だ。複雑にベクトルがからむ多様なまちと言えるだろうか。その場所性をふまえた上で超高層を何本も立てる計画が進行している。何人ものデザイナー・アーキテクトを入れた個性に富んだ計画だ。名古屋はどうだろう。超高層の開発というと駅前が今まさにラッシュだが、名古屋らしさはあるだろうか。次の目標としてリニア開通があるが、そうなる首都機能の移転も視野にあって良いはずである。まちのあり方を根幹から見直す必要があるが、どこかで検討はなされているのだろうか。

さまざまな話を聞いて帰ってみるとパリでテロが起きていた。多数の死者が出た惨たらしい事件である。相手が一方的な直線思考であるのに対し、フランスには相手の感情を顧みずに宗教的な風刺を行った経緯もある。意思と意思がぶつかったということになるだろうか。残念ながら9・11のテロからわれわれに進化はなく、短絡的な解決が解決にならない証左になった。内藤さんは話の最後に都市は直線と循環の2つを組み合わせ、らせん的な進み方があるのではないかと提言された。直線を巻き込みながら進む思考回路が必要かもしれない。標的とされているのは都市なのだ。武器を持つ彼らに対し防御は必要だが、時間をかけた解決が必要である。

竹中アシュ |
竹中設計事務所アシュ



「都市の多生」について考える

海空ツアー、基調講演に引き続きシンポジウムが行われました。私たちは実際に瀬口・竹中両氏と中川運河と名古屋城を巡り、名古屋城築城からの変遷や中川運河周辺に見る近代の名古屋のまちの側面を考えつつテレビ塔に到着しました。そして時代を切り口にして都市を考える内藤氏の講演をうかがった後です。まさにメインテーマを語るお膳立が整った状況でした。

最初に竹中氏から「都市の多生」を考えるための素材提供として、「中川運河の空間コード研究」の説明がされました。空間コードとは、①都市のランドスケープ②関係性を映し出す景観③新しい公共圏である—という3定義に分けてのレクチャーがスライドで行われました。その空間コードは、先ほど船からもいくつか発見できた風景たちです。「コード発見・記述・応用の話を経て空間コードは都市を理解する上でのコミュニケーションツールになり多面的になっていく。そして時間から都市を見るとスケールの異なる時間が混在し、形跡は時間の節目を示しているのではないかと」もさらっと触られました。

その竹中氏のキーワードについて大喜利のようにパネリスト各氏は答えていか

れます。瀬口氏が途中で「都市の多生って提案することじゃ」とコメントしたように都市の成り立ちを踏まえ各氏の都市(名古屋)の戦略提案が展開されていきました。

例えば内藤氏は名古屋城が木造か本物かではなく戦略的に得になるか考えるべきで、フランク・ゲーリーのビルバオが示すように地元建物はあのデザインは大嫌いだが大成功だといっている事例を出されました。しかし多くの人の希望を集める建築というのは意図してはつくりたいと釘も刺されました。

これに対し涌井氏は具体的に、リニアが名古屋を東京の郊外に意味づけるので(!)名古屋駅エリアはスピードで豊かさを求め、栄エリアは都市の記憶を持ち文化を深めるといふ二本足で立ってはどうか意見を述べられました。また、瀬口氏はさらに具体的に名古屋城エリアの記憶の継承方式の発展の仕方を提案されました。名古屋駅エリアは現状も多様性はあるし地下街はもっと明瞭にビルをつないで計画していくと良いと。

未来提言に至る前には、時間の節目についての意見交換があったのですが、今を認識する上でこれは大変面白いものでした。涌井氏によると現在は農業革命・

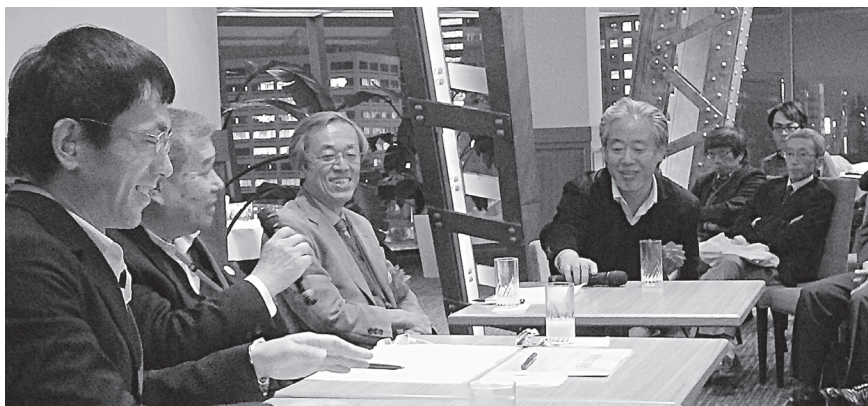
産業革命・につぐ第三の変革にあって、都市が合理的な装置であったものが暮らしのスケールに戻り、多様なあいまいさに流れていること。

内藤氏からは20世紀の病として空間の話が時間の話を排除してしまっていて、現代を写す鏡の住宅展示場に時間イメージはゼロになってしまっている状況という話。しかし、瀬口氏から都市計画における時代の重層性は名古屋街区が形成された400年間存在するという話があり、生きている時間の違いでスケールの違う時間があり、建物も永続的に捉えるのか循環的に捉えるのか、視点の違いは大きいことに気づかされました。けれど、人間は空間とも時間とも折り合せて色々なスペーススケールで未来軸に向かうだけだと。

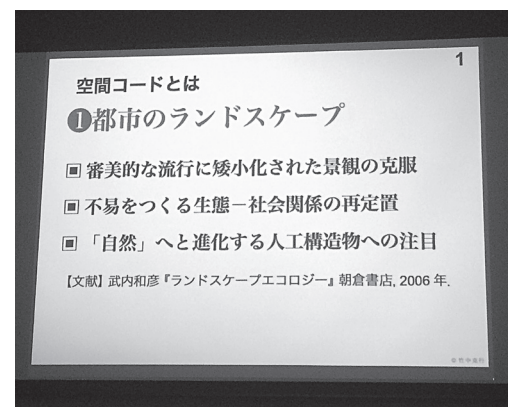
都市の多生という情緒的なタイトルのシンポジウムでしたが、都市の重層性や都市戦略について議論が深められたと思います。質疑では内藤氏に新国立競技場についての意見をお答えいただき、建築と文化を考える貴重な時間でした。



近藤万記子 |
ホームデコール設計事務所



シンポジウムの様子 (左から竹中克之・涌井史郎・瀬口哲夫・内藤廣の4氏)



スライドでの「空間コード」の説明

空間コードとは

①都市のランドスケープ

- ▣ 審美的な流行に矮小化された景観の克服
- ▣ 不易をつくる生態-社会関係の再定置
- ▣ 「自然」へと進化する人工構造物への注目

【文献】武内和彦『ランドスケープエコロジー』朝倉書店、2006年。

第32回 JIA 東海支部設計競技 2次審査結果

「首相官邸」

■一般の部

金賞	「起きて半畳、寝て一畳～20XX年、スラムの中の首相官邸」	原正彦（東洋大学人間環境デザイン学科技術員）
銀賞	「商店街がエントランスホールとなる首相官邸」	山田寛（フリーランス）
銀賞	「旗幟、彩る生活」	奥野智士（関西大学大学院 M1）
		西田貫人（関西大学大学院 M1）
銀賞	「虚実の消失点の狭間に棲む」	坪田一平（大阪市立大学大学院 M1）
銅賞	「遊牧民化する首相官邸」	山田寛（フリーランス）
	「Mega Throne」	李上（九州大学大学院 D1）

■学生の部

金賞	「縁の下のちからもち」	中村純子（大阪大学4年）
		三屋皓紀（大阪大学4年）
金賞	「首相官邸システム」	上奥璃奈（愛知淑徳大学3年）
銀賞	「平和の塔」	桐谷万奈人（名城大学4年）
		川端一輝（名城大学4年）
銅賞	「首相のカバン」	前田真里（名城大学2年）
	「70億の独裁国家」	山田泰弘（愛知淑徳大学3年）
	「境界上の官邸」	牧田光（工学院大学4年）

審査委員（順不同・敬称略）

◎西沢大良
（西沢大良建築設計事務所）



○南川祐輝
（南川祐輝建築事務所）



松浦健治郎（三重大学助教）



八木紀彰
（八木紀彰建築設計事務所）



山田浩史（Hiro Planning）



吉村真基（D.I.G Architects）



（◎：ゲスト審査員 ○：審査員長）

■審査経過

設計競技特別委員会委員長 矢田義典



「0.9対0.9対1.2」。11月14日に行われた、JIA 東海支部建築設計競技の公開2次審査は、こんな調子で始まりました。審査員の持ち点は3点だから、間違いではない。普通はみんな1点なのでしょうが、ゲスト審査員の西沢さんはなんとか差をつけたいと苦心され、このような採点となったのでしょうか。これは学生の部での出来事なのですが、つまりはあまり差が見当たらなかったのです。学生の部は最終的に2作品に絞り、決戦投票を行ったのだが、

ここでも同点。結局2つが金賞を受賞することとなった。学生の部に比べ、一般の部は比較的スムーズに賞が確定した。金賞を受賞した原正彦さんの「起きて半畳、寝て一畳 20XX スラムの中の首相官邸」が頭ひとつ抜けており、本人のキャラクターも良く、妥当な結果だと感じました。今回は応募作品が少なかったが、やはり2次審査会になるとレベルもグッと上がり、見ごたえある審査会だと感じました。

■ 審査総評

審査員長 南川祐輝

「首相官邸」というコンペのテーマ、それは応募者にとってはもちろんのこと、主催者側、もしくは審査員にとっても難題だったに違いない。珍奇なテーマを設定しているつもりは毛頭なく、むしろ、ドストレートの直球勝負を挑もうというもの。なぜこのようなテーマのコンペを企画したのか？ その辺の種明かしを少しだけ……。

3.11 以後、建築のデザインコードが相当変化したように思う。ザックリ言うと、建築に対してアイコンとしての象徴性が必要とされなくなっている傾向が強いように感じる。昨今、公共施設などを計画する際にワークショップが盛んに行われ、市民等の声を聞くことにより「開かれた建築」、「人に優しい建築」をつくるよう求められるケースが多くなっている。それ自体、一般的に見れば良いことなのだろう。しかしそこで考えてしまう。ホントのようなことの中に、隠された少しのウソがあるのではないかと。そしてそのウソが全体を支配しているのではないかと。事実が真実を語っているとは限らない。建築を生業としながら、日々そんな矛盾と付き合っているような気がしてならない。

このご時世にあって強いアイコンを備えた建築は是か非か。そこを聞きたいと思ったのが率直なところで、住居として、最も強いであろうアイコンを持つビルディングタイプとして選んだテーマが「首相官邸」だった。この住居を考える際、諸室を計画しただけでは意味を成さず、必然的にアイロニカルな案とならざるを得ない。社会的、政治的状況を鑑みなければつくるのが難しい状況をあえて設定した。応募者のみならず、われわれ主催者側（審査員）も一緒にこのテーマについて考えたいと思ったわけであるが、両者の間には約 20 年程の年齢差があり、今回のコンペを通してどういう切り口があるのか、どういう価値観の違いがあるのか、または共通点があるのかにも非常に興味があった。結果として応募総数自体はそれほど多くなかったが、1 次・2 次審査を通じて内容の濃い議論ができたと思う。一般の部での金賞受賞者が発言していたように、このテーマはここで終わりというのではなく、今後も続いていくのだと私も考えている。

■ 西沢大良 記念講演会

牧ヒデアキ | makira DESIGN



JIA 東海支部設計競技の表彰式の後、ゲスト審査員の西沢大良氏の記念講演会が行われました。現代建築の特徴である「人工物であるだけでなく自然物でもある」「現実的であるだけでなく魔術的である」「小種多量であるだけでなく多種多量である」というテーマについて西沢氏の建築作品などをもとに説明いただきました。

講演会を通して、ロジカルに建築を組み立てながらも、ロジッ

■ 審査を終えて

ゲスト審査員 西沢大良

「首相官邸」というコンペの出題は、もともと南川さん（審査委員長）の発案だった。私は初めてそれを聞いたとき、難しすぎて上手くいかないだろうと思った。住宅コンペとしても難しいし（首相官邸はパラッツォであってヴィラではないから、住宅コンペとしては難しくなる）、あるいは住み手の側から考えても難しいのだ（今の官邸の住み手は、総理大臣というより絶対君主のように振る舞う安倍晋三だ）。だが南川さんは絶対に成功しますと言葉少なく述べ、私は半信半疑のままゲスト審査を引き受けることになった。

私が自分の誤りに気づいたのは、審査の最中だ。まず一次審査の議論が非常に面白く、予想外の提案も多かった。さらに二次審査になると、応募者が理想的な「首相官邸」の姿を口々に語り、公開で議論することになった。この議論の最中に私が気づいたのは、この公開審査が、なんだか新しいタイプの政治集会のように感じているということだった。

ふだん私は大小さまざまな政治集会に出かけるが、現役建築家に会ったことがなく、建築と政治を同じように受け止めている同業者を見たことがない。だが今回の審査では、建築的な提案と政治的な課題が一点に集約されていて、その場にいる全員が、政治的な課題を建築で解決しようとしていたのだ。だから私にとって通常政治集会の数倍の面白さがあり、ほとんど未知の政治運動の誕生に立ち会っているような感覚になった。もちろんこのことは、「首相官邸」という南川さんの出題なくしてありえなかったことだ。

政治的な話題をコンペで扱うことは、昨今の企業主催の賞金コンペでは実現不可能になっている（企業の担当者から却下される）。だが今の時代ほど、政治が生活に大きな影響を及ぼしている時代はない。だから「政治と生活」について住宅コンペを通して考えること、その解答の良し悪しを公開審査で論じることは、今最も必要なことなのだ。JIA 東海支部の始めたこのアイデアコンペは、21 世紀のあらゆるコンペのモデルになるような価値をもっていると思う。

クを超えた生物的・生理的な部分での感覚を丁寧に建築設計に展開されていることに感銘を受けました。一見なんでもなさそうに見える部分に非常にデリケートな構造的解決・空間的解決・施行的配慮がなされていました。西沢氏は日常のいろいろなことを俯瞰視され深い部分から洞察されており、それらを建築設計の中でどのように生かしていくべきかということを常に考えられているのだろうと感じました。昨今見受けられる日和見的な言葉ではなく、実に考えさせられる重みのある言葉の数々でした。

「われわれは近代建築をつくるだけでなく現代建築をつくっていきましょう」という言葉で講演会が閉会しました。

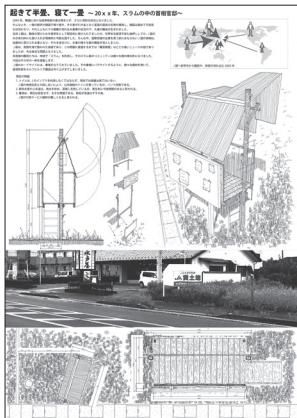
■ 一般の部

金賞

「起きて半畳、寝て一畳」

原 正彦

(東洋大学人間環境デザイン学科技術員)



当然のことながら、一次審査においてはA2ボード1枚の中にある情報を頼りに審査をするわけで、案そのものを選ぶことになる。今回のように2次審査において質疑応答が行われる場合、案はもちろんなのだが、それをつくった人を選ぶという要素も重要なファクターとなる。つくられた案がその作者からどういう経緯で生まれたものなのか。その案が作者にとってどれほどのリアリティを持っているのか。建築に限らないが、きれいなうまくまとめるのはそれほど難しいことではない。人の心を動かす表現とは、たとえそれが静かな物であったとしても、作者自身の魂の叫びを伴うことによって生まれてくるものだと思う。

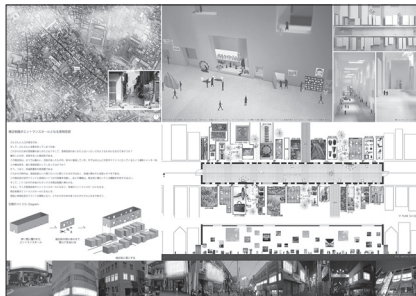
今回の金賞受賞作、「起きて半畳、寝て一畳」は近い将来、J国に流入した難民がスラムを形成し、独自に「首相官邸」をつくってしまうという提案。察するに現在内戦状態にあるシリアからEUになだれ込む難民の状況と将来J国に起こるであろうフィクションをオーバーラップさせてこの案はつくられている。

2次審査において、提案された建築と作者が完全にシンクロしたと私は感じた。彼にとってここが終わりではなく、むしろある意味での十字架を背負ってしまったのかもしれない。(南川祐輝)

銀賞

「商店街がエントランスホールとなる首相官邸」

山田 寛 (フリーランス)



偶然にも、筆者が銅賞で講評した同じ作者による作品である。本作品は商店街の街路部分にホワイトキューブを挿入し、商店街共通のエントランスホールとし、店舗の一部に首相官邸機能も入れることで、首相官邸のエントランスホールも兼ねるという提案である。地方都市の商店街のアーケードは雨に濡れないための装置であったわけだが、薄暗く寂れた商店街の象徴になっている面もある。作者はそのようなアーケード空間を現代的に再生させ、魅力的なコモンスペースにすることで商店街の活性化を図ることを狙っている。DH比も適切であり、実際にこのような空間ができれば、非常に魅力的だろう。

一方で金賞に届かなかった点についても言及したい。第一に、銅賞の作品と同様に「首相官邸」というテーマに答えていないように思える内容だったことが挙げられる。例えば、平面図を見ると、エントランスホールに面する店舗の名称に首相官邸の機能と思われるものがない。商店街の再生の提案としては素晴らしいが、「首相官邸」として見たときに適合出来ていない部分が多々見られる。

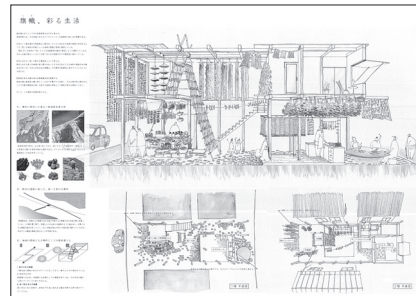
銅賞の講評でも述べたように作者の能力の高さには確かなものがある。今後は与えられたテーマにアジャストできる能力を磨いていってもらいたい。(松浦健治郎)

銀賞・審査員特別賞

「旗幟、彩る生活」

奥野智士 (関西大学大学院 M1)

西田貫人 (関西大学大学院 M1)



新潟県の某所に乾物のための製作小屋をつくり、そこを官邸にしたらどうかという提案である。首相官邸というより村長の家に近いものになっているが、その空間イメージが応募作品中最も鮮烈であったため、特別賞とした。

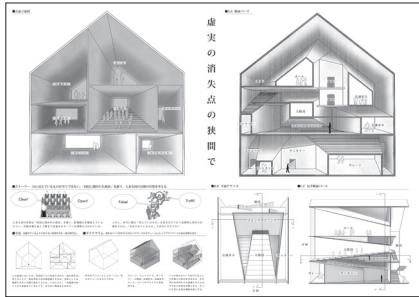
公開審査の席で述べたことを繰り返すと、この提案の背後にある考えは、政治的には一種の共同体主義である。その点で政治的なセンスがあるとはほとんど言えないが、ただし、現首相が史上最悪の意味における共同体主義者であることからすると(日米運命共同体主義、ないし岸一族血統主義)、首相のもっている一面に反応していると言えなくもない。

首相官邸という出題から離れて考えると、地域のさまざまな作物を乾物にする過程で空間がつくられるという考え方は、もちろん大きな可能性をもっている。欲を言えば、今の日本の産業形態の困難さ、つまり没落してゆく製造業がなぜ戦争を必要とするのか、なぜ過去の製造業(例えば乾物)に戻れないのか、そして来るべき産業は何なのかについて、知的関心をもって欲しい。この提案は来るべき産業をもとに展開されてこそ意味がある。今後に期待したい。(西沢大良)

銀賞

「虚実の消失点の狭間に棲む」

坪田 一平 (大阪市立大学大学院 M1)



本作品は、最もテーマを的確に捉まえていた提案ではないかと思う。「われわれに見えているものは、見せられているものに過ぎないのではないか」という問いかけを伏線に、まず家型のボリュームが断面的に仕切られただけのオープンな、というより見え過ぎてむしろショーケースのような「官邸」が示される。ところがそれは、実は「見せる用」の断面であり、パース効果を生じさせるべく要素を斜めに挿入する操作によってファサードからは見えない裏が生じるというのが、提案の骨子である。この「知覚できない裏」をつくるためには「ショーケース化した表」が必要不可欠であることにも注目したい。2つの要素が文字通り表裏となって関係しあっていることが鋭い批評性を獲得している。

単にゾーニング上の裏側をつくるのでなく2つの異なる断面形式を組み合わせることによって「知覚の裏側」をつくってみせるという手法が、政治やメディアをめぐる今日の社会のあり様に鋭く切り込んでいたと思う。

惜しむらくは、家型の採用が果たして最適であったかどうかについて若干疑問が残る点と、折角なら「裏側」は単なる住居ではなくもっと奇想天外な、あるいは、もっとダークな事態が展開していても良かったのではないかと。そうすればむしろ空間の持つ強い形式性が、より大らかな批評性を獲得したのではないかと思う。(吉村真基)

銅賞

「遊牧民化する首相官邸」

山田 寛 (フリーランス)



本作品はコンパクトシティの建築化、すなわち、まちを立体化させ、その中で首相官邸が遊牧民のようにいろいろな場所に移り住むという提案である。得点が高かった理由のひとつとして、プレゼンテーションのうまさがある。断面的に魅力的な多様な吹き抜け空間が模型や断面図により上手く表現されており、まちを集約化することによる空間的な魅力を活き活きと見せている。

一方で、本作品には弱点もある。実は、私自身は本作品に得点を入れていない。その理由として、「首相官邸」というテーマにアジャストしているように思えなかったことが挙げられる。冒頭にも述べたようにコンパクトシティの建築化の提案意図は伝わってくるが、それと「首相官邸」のつながりが非常に弱い。また、公共施設としてはあり得るが、住宅が内包すると考えた場合、どのように住まうのかが空間的に表現できていなかったことも惜しかったといえる。

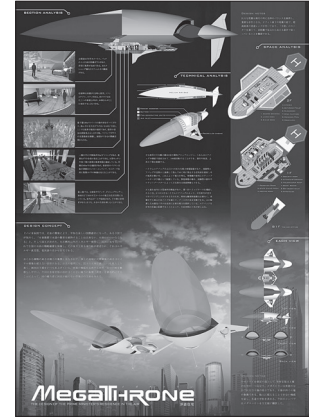
いずれにしても、作者の設計技量の高さや建築に対する思いは十分に伝わってきた。今後の飛躍に期待したい。

(松浦健治郎)

銅賞

「Mega Throne」

李 上 (九州大学大学院 D1)



首相官邸を考えると、首相という存在のあり方、そして国民との関係性、この部分をどのように設定するかで設計の方向性が定まる。今回、多くの作品で首相は国民に歩み寄り、首相官邸は地域に開かれていた。

「Mega Throne」(万王座)と名付けられた本作品の官邸はドバイの地に計画され、飛行することで圧倒的な高度をもって何人も超えられない高さから国民を監視するのである。アイデアコンペでは、このような大胆な計画にも光を当てたいと思う。週1回のヘリコプターによる食糧補給、ホテル屋上からの給水など徹底して地上に降りない設定も面白い。

しかしながら、建物内部空間は少々平凡であり、建築と言うよりはプロダクトデザイン要素が強い。建築物を浮遊させる(アニメの世界に陥る危険性はあるが)といったアプローチで考えると、違った形状も生まれたのではないかと思う。また、この大胆な設定にアイロニカルな意図を含んでいると期待していたのだが、実は首相と君主(王)を混同解釈している部分が何れも残念であった。

とはいえ、グラフィック表現が美しく、タイトルロゴデザインにまで手を抜かない作者の姿勢とセンスを評価したい。

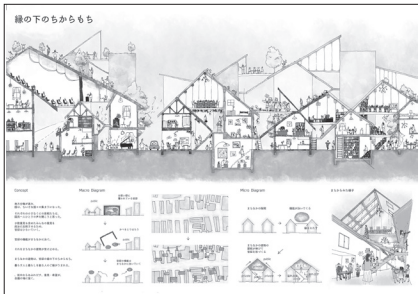
(山田浩史)

■ 学生の部

金賞

「縁の下のちからもち」

中村 純子 (大阪大学 4年)
三屋 皓紀 (大阪大学 4年)



1次審査のときに、唯一明るい権力というものを示し印象に残っていた作品である。権力というものは決して悪いことばかりではない。行使の仕方を工夫すれば、社会を変える大きなチャンスを生み出すものでもある。

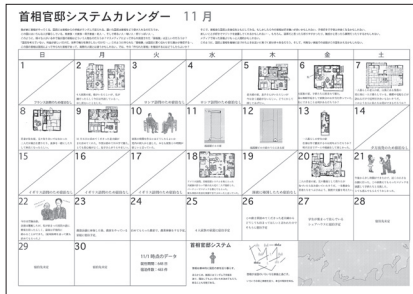
地方分権が進み、国が小さな国々の集まりになったときに、人々の声をよりダイレクトに政治に反映させるための提案である。既存のまちを利用して、暮らしと官邸を一体化する。最小限の操作で作り出された新しい公共は、政治を身近に感じられるようにしたいという願いの現れでもあるようだ。昔の藩や欧州の小さな公国程度の規模を想定すれば、中心街区の発展的利用方法としても興味深い。プレゼンで見せた鳥瞰パースには、躍動感と説得力があった。

問題は、見え過ぎることである。統治機構として知らぬが仏の部分無く、メルヘンに過ぎるとの指摘も出た。しかしこれからの時代は、社会の大きな変化に対応しながら人々が手をつなぎ、なんとかうまくやっていく時代でもある。それには縁をつないで知恵を出す、懐の深い場が必要だ。作者がモデルとした大阪の中崎町のまちではないが、こんな人間味のある官邸が、あってもよいのではないだろうか。(八木紀彰)

金賞・審査員特別賞

「首相官邸システム」

上奥璃奈 (愛知淑徳大学 3年)



首相に日本中を民泊してもらうことで、官邸に代えたらどうかという提案である。プレゼンはスマートであり、首相の宿泊先をカレンダー1枚で示すことによって構想を描き切っている。ドローイングはコンセプチュアルになりすぎない程度の抑えた画法であり、そのバランス感覚の良さは1次審査のときから群を抜いていた。この作者は優秀である。

公開審査の最中に述べたことを繰り返すと、この提案の背後にある考えは、政治的にはほとんどアナーキズムである。ただし、19世紀的なアナーキズムとは明瞭に異なっていて、むしろガンジーの思想に近いものになっている。そして現首相・安倍晋三に最も欠落しているのが、ガンジーの始めた非暴力主義・非英米主義・脱植民地主義である。その意味で、この作者はそうと知らずに政治的なセンスも持ち合わせている。

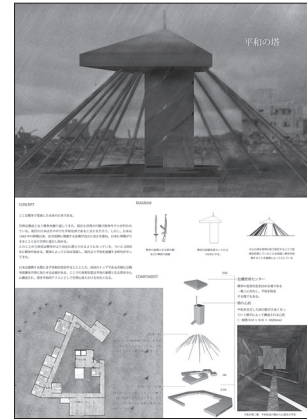
強いてこの提案に欲を言うとしたら、訪問先のなかにもう少し異質な家屋や生活形態が含まれていても良かったかもしれない(年越し派遣村、新大久保のコリアンタウンなど)。だがそれとてこの作者の構想の質を下げるほどではない。建築と政治をめぐる鮮やかな提案である。

(西沢大良)

銀賞

「平和の塔」

桐谷 万奈人 (名城大学 4年)
川端 一輝 (名城大学 4年)



今回、時代背景を戦後の未来に設定した作品は数点あったが、中でも、暗さ、不気味さが、ひと際異彩を放っていた。しかもタイトルは「平和の塔」である。

戦争により荒廃した日本の復興を願って建てられた首相官邸、その独特のフォルムは、戦争の象徴となる武器を抑制し戦争放棄を表現している。と説明されているが、いまひとつ理解できない部分もある。しかしながら、平面を立体的にずらすことで決定された上部三角形、気持のよい中庭空間や新内閣披露の大階段といった細かな部分まで考えられた低層部など、ただ形状優先で組み立てられているわけではないところに好感をもった。

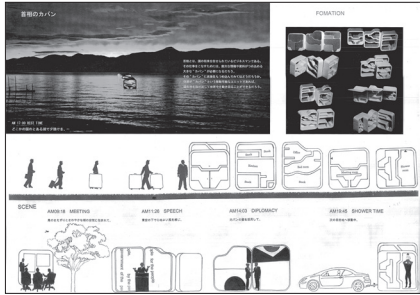
けれども、やはりこの作品の魅力は圧倒的なボリューム感と不気味な色彩表現なのである。2次審査での追加パースによって説明されたりアリティィーは、かえってこの作品の特異な部分を薄れさせてしまったようにも思える。そこがプレゼンテーションの難しさであろう。高さ50mという威圧的なスケール感がうまく表現できていなかったところも惜しい。

しかしながら、作者の持つ独創性は十分に魅力的であり、多種多様化していく時代において伸ばすべき個性だと思いを期待したい。(山田浩史)

銅賞

「首相のカバン」

前田真里 (名城大学2年)



今やスマートフォンが一台あれば事務仕事は大抵のことができてしまう状況にあり、高い家賃を払って事務所を借りなくても成立する「ノマド企業」などという形態も実際にあるようだ。

この案はデフォルメしたスーツケースが場面に応じて形を変化させ、世界中を旅しながらさまざまな場所で政治機能としての「首相官邸」が成立するというもの。なんとも軽やかで、爽やかな提案。モバイル系の案はいくつかあったのだが、その中でも全体のバランスが非常に良いプレゼンが評価され銅賞となった。

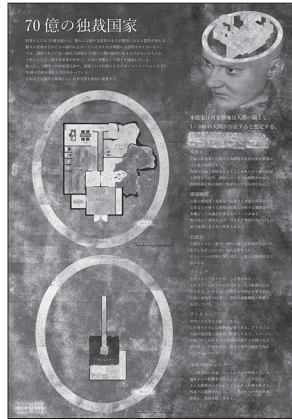
メインのパースは夕闇をバックに湖の上に浮かんでいる。これはこれで非常にリリカルなのだが……。個人的には好きなシチュエーションではあるし、自分も似たような状況をつくっているので賛同したいのは山々なれど、何かひっかかるものを感じる。図面に表現されている軽やかさを掘り下げて、そこから派生するストーリーをもう少し展開できればこの案はもっと化けたかもしれないと思う。このパースによって開きそうなイメージが別の場所へ定着してしまい、ある意味閉じてしまったように感じる。

とはいえ、蓋を開けてみれば、学部2年生とのこと。今後益々の研鑽を期待しています。(南川祐輝)

銅賞

「70億の独裁国家」

山田 泰弘 (愛知淑徳大学3年)



個人の頭の中に広がる意思の世界。それを周囲からは認知されない隠れた国家として認識し、国家を統べる首相官邸を脳内に現してみせた作品である。

この仮想空間は、左脳や右脳といった脳の各部分の構造的特性に応じ、執務室や諜報機関、リビングなどの官邸機能を重ね合わせることで生成されている。誰もが一度はイメージしたことがある自我の世界にも近く、実際に中に入ることはできなくても意識としては容易に入っていくことができる。

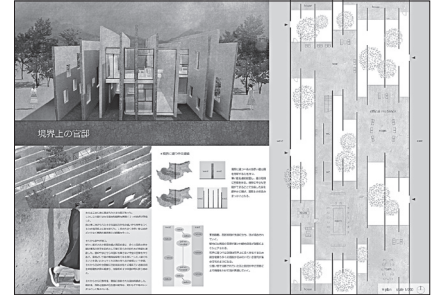
しかし、その容易さゆえに室の配置計画においては予定調和の感が否めず、下階に設けた核シェルターを含め独創性に欠けていた。丁寧な表現ではあるのだが、他人をどこまで深く受け入れるかで終わってしまった閉鎖的な構成も気になった。

聞くと作者は常々、集団の中で個の意思を表明しない周囲の人間に対し、もどかしさと孤独を感じているらしい。この官邸はそれに対する叛骨のイメージでもあるようだ。しかし個性といえれば聞こえはいいが、そこには他に同調できない偏狭さが潜んでいることもまた事実。上下から水平に、ときにはこちらから歩み寄る空間が周りにあれば、小さな独裁の王国同士も連帯し、大きな意思が生まれるだろう。(八木紀彰)

銅賞

「境界上の官邸」

牧田 光 (工学院大学4年)



「境界上の官邸」は西と東に分かれた国の境界線が首相官邸になった作品である。この境界は複数の壁によってレイヤー状になっており、そのレイヤー状の空間に両国の官邸が展開している。

われわれは世界に沢山の便宜的な境界を引いて生活しているが、実際には、例えばA県とB県の間に引かれた地図上の境界を標識以外の手段で認知することはない。それでもA県を抜けB県に入ればしばらくすれば、B県らしい空気というのは確実に感じたりするわけで、その意味で境界がデジタルな一本線ではなく、徐々に移り変わる複数のレイヤー状の空間として感じられるという着眼は官邸というテーマを横において、境界のあり方として説得力があった。

テーマの捉え方や設定は良かったと思うが、首相官邸というテーマに対する応答が若干手薄だったことが惜まれる。なぜ境界上に官邸があるのか、境界上に官邸があることで何が起るのかについて、作品中でもっと言及されるとなお良かったのではないかと。(吉村真基)

そうだ兵庫、行こう

JIA近畿支部住宅部会とJIA愛知住宅研究会との連携企画第2弾として、今回は近畿支部の主導により、兵庫県の住宅建築3作品を見学するツアーを行った。遠距離にある住宅建築を見学する機会というのは、それだけでもなかなか経験できないことだが、中でも質の高い3作品について施主や設計者の話を聞きながら見学できるという大変貴重な見学会となった。また、見学会の後の懇親会でも施主や設計者を交

えて、住宅建築について語り合うひと時を持つことができた。住宅見学にご協力いただいた施主の方々、設計者の方々、近畿支部の世話人の方々に深く感謝したい。また、JIA近畿支部住宅部会との連携企画は今後も建築見学ツアーという形であれば継続的に企画していきたいと考えている。

笹野直之 | 笹野空間設計



■ 生山邸

設計 | arte空間研究所 (生山雅英)

山の斜面にころんと置いた、そんな感じのコンパクトな白い箱。施主が期間限定で貸し出して、設計者が入居した、稀有な事例。いうまでもなく、とても大切に暮らしておられました。阪神エリアでは山手から見下ろす場合、ほとんどが逆光になってしまうが、北向きの斜面に建つこの住宅は、宝塚のまちを順光で見下ろすことができるのが特徴的である。驚いたのは、白い外壁がほとんど汚れていなかったこと、基壇のRC部とその上にある鉄骨部分との境目で仕上げのひび割れが生じていなかったこと、施工者との連携と緻密な工事監理の賜物と理解した。

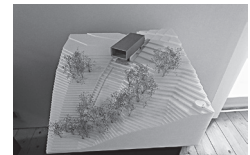
齋藤正吉 | 齋藤正吉建築研究所



コンパクトな白い箱のような外観



室内から宝塚のまちを一望できる



生山邸模型

■ 積層の家

設計 | 大谷弘明

雑誌などで写真を眺めながら、積層されたPC板のみで全体が秩序よく構成されるその洗練性に感嘆する一方、ともすると生活を受け止める柔らかさに欠けた窮屈な建築なのかな、と想像していた。実際に訪れてみると、この建築の1/3を占める勾配のゆるやかな階段が、部屋に属さない居場所を提供しながら建物全体を柔らかくつないでいる。都心部にありながら静か(PC積層壁面の凹凸が音を吸収する)で明るすぎない光環境も相まって、しっとりと優しい居住空間であった。PC板の積層による成立ちの秩序こそが柔らかな居心地をもたらしているということが訪れてみて深く認識できた。

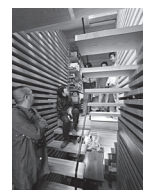
塩田有紀 | 塩田有紀建築設計事務所



内観



外観



見学者と談笑する大谷氏

■ 六甲の住居

設計 | タトアーキテクト / 島田陽建築設計事務所

場所は六甲の麓で、北側には擁壁、南には神戸のまち並みや瀬戸内海まで見渡せる絶好のロケーションでありながら階段でしかアクセスできない土地である。景色の良い方向だけに開くのではなく、四方向ガラス張りとして敷地から見える方向に対して全て等価に扱い、この場所性を更に感じることができるよう意図していると感じた。

建築資材を人力で運ぶ必要性がありヒューマンなスケールでつくられていることもこの建築をよりプリミティブな印象を与えている。お施主さんが「共犯者のような感覚でつくれたことが良かった」と笑顔で話しているのが印象深かった。

田中義彰 | TSCアーキテクト



外観



六甲の住宅を見上げながら、みんなで階段を上る



四方がガラス張りの室内

日本—フランス 土の建築交流企画「これからの時代、土の建築ができること」

住宅研究会主催シンポジウム「これからの時代、土の建築ができること」が、2015年11月3日、TOTO名古屋ショールームにて開催された。70名を超える参加者の数からも、テーマに対する関心の高さがうかがえる。フランスの国立グルノーブル建築大学クラテール(土の建築研究所)教授で建築家でもあるジャン・マリー・ルティエック氏、土の装飾芸術家シルヴィ・ウイラーク氏、アトリエモビル主宰・建築家の丸山欣也氏、左官の松木憲司氏の4氏に登壇参加いただいた。前半の講演で、ジャン氏、丸山氏はクラテールにおける活動の内容や世界の建築家による土建築の試みを紹介し、シルヴィ氏、松木氏はこれまでの土にかかわる仕事を、色彩豊かにスライドで紹介された。クラテール(CRA Terre)とは、フランス・国立グルノーブル建築大学に1979年に設立された研究所で、技術者養

成、職人や建築家などの相互交流などを推進する画期的な土建築専門の研究機関である。クラテールでは毎年、土の祭りが開催され、日本からも建築家や左官が参加してきた。丸山氏が制作した土の作品なども紹介された。シルヴィ氏は、道具を大事にし、現場を汚さず、動きに無駄のない日本の職人氣質に感銘を受け、多くを学んだと語っていた。後半のパネルディスカッションは、土の魅力、これからの時代の建築に土をどう生かすのかが話し合われた。クラテールでは、世界中の大学などの教育機関、職人や建築家と連携を深め、それぞれの立場を活かして土の魅力、素晴らしさを広めていきたいと考えているとの



参加者は70名を超え、盛況のシンポジウム会場



談笑する登壇者たち(左から松木憲司、シルヴィ・ウイラーク、ジャン・マリー・ルティエック、丸山欣也の4氏)

こと。土建築の断熱対応に関しては、ヨーロッパでも日本同様に苦慮している部分も多いが、土の特性を活かした省エネのあり方を実践しているとのこと。土壁や左官は、日本固有のものであるというイメージが強いが、世界の視点からあらためて見つめ直し、これからの時代にふさわしいオーガニックな建築のあり方を考える素晴らしい機会となった。



宇野勇治 | 宇野総合計画事務所

地域会だより

<東海支部>

- 11/13 東海支部大会「都市の多生」
- 11/14 第32回JIA東海支部設計競技2次公開審査・表彰式・記念講演会
- 11/27 支部役員会(岐阜持ち出し)
- 11/27 みんなの森 ぎふメディアコスモス見学会・講演会・懇親会
- 1/28 支部役員会

<静岡>

- 11/05 11月静岡地域会定例役員会の開催
- 11/20 (一社)静岡県設備設計協会創立50周年記念行事に出席
- 12/10 12月静岡地域会定例役員会(拡大)の開催、忘年会
- 1/14 1月静岡地域会定例役員会の開催
- 1/22 平成28年建築関係団体新年会を共同開催

<愛知>

- 11/3 住宅研究会セミナー「これからの時代、土の建築ができること」
- 11/14~15 事業委員会 長者町えびす祭り 建築家フェスティバル
- 11/18 社会貢献CPD紙コップタワーを作ろう
- 11/28 事業委員会 猪高小学校建築教室
- 12/2 賛助会企画CPD研修 見学会(LIXIL)

1/15 賛助会商品PR会+新年会

2/4、10 実務セミナー古澤弁護士を招いて

<岐阜>

平成27年度 JIA 岐阜地域会 第5回 役員会 開催
日時:平成27年12月予定
場所:ハートスクエアG 小研修室

<三重>

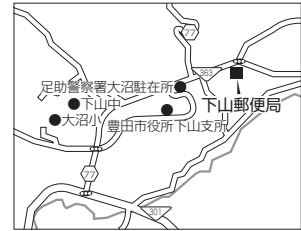
- 11/6 第5回例会、会員研修会4「JIA会員による発表」(森本雅史、米田雅樹)
- 12/11 第6回役員会、第6回例会(持出しTOTO名古屋S/R)、会員研修会5「建材研修会」、忘年会
- 1/15 第7回例会 会員研修会6(三重県総合文化センター)
- 1/23 建築ラリー 2016(※詳細はP22Bulletin Boardに掲載)
- 2/7 建築ウォッチング「建築家と松阪を歩こう」(1/23)、建築ウォッチング「建築家と四日市を歩こう」(1/30)、建築文化講演会、建築シンポジウム(2/6)、建築ウォッチング「建築家と伊勢を歩こう」(2/7)



ファサード (現在の姿・筆者撮影)



左 | 竣工間もないころの正面写真 (山下郵便局より提供・昭和9年ころの撮影。以下同じ) 右上 | 同・内部写真 右下 | 同・裏側の写真



所在地: 豊田市大沼町八沢47-2
アクセス: 名鉄バス・下山バス「大沼」
下車、徒歩1分
参考文献: 『愛知県の近代化遺産』

■発掘者のコメント

三河路を旧下山村に車を走らせると、三河湖方面と足助方面の三叉路の交差点右手に旧山下郵便局が突如現れます。郵便局長にお話を伺うために訪れたのは、山裾が紅葉で色づき始めたころでした。近年雨漏りがするようになり修理のことも考えなければならない時期に来たのかも知れなとのことでした。また、「当時から正面入り口の扉がアルミに変わり、向かって左側の局長室であったところの窓がアルミのドアに変更され、その他一部サッシに変わっておりますが、ほとんど当時の写真と比較し

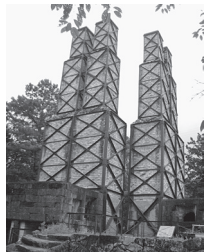
ても変更されておられません」とのことです。

愛知県の近代化遺産により「この建物は昭和6 (1931)年12月11日に竣工している。建築面積124㎡、延面積147㎡、木造平屋建てだが、道路面(開口4.5間、奥行1.5間)を洋風2階建てとしている。モルタル塗りだが、石造風に横目地を入れ、正面に等間隔に配列した4本の柱は訪れる人に安心感を与えている。1階を客溜りと隣接した局長室、2階には和室6畳を2間付けていて、局員の休憩室としていた。局長室は上質な仕様で、竣工当時は、電話加入者は3件だが貯

金預入高は12万円で、接待のための応接室として、白漆喰塗りで天井中心飾りにシャンデリアを付けていた。1階の執務部分は平屋建て寄棟造り、棧瓦葺きの局員事務室・作業室があり、電話交換室(12㎡)を付けている。昭和47 (1972)年、隣地に新局舎が完成し、閉鎖された。以後、貸事務所として使用されたが、現在は郵便局の物品保管所となっている」とのことです。



塚本隆典 | 塚本建築設計事務所



葦山反射炉



三養荘別館「宿木」



三養荘新館玄關



■発掘者コメント

三島駅から伊豆箱根鉄道で伊豆長岡駅に下車し、一日の行程を想定して、駅前からレンタサイクルにて、まず葦山反射炉をめざす。「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に登録された今は、多くの見学者にあふれていた。そこから北へ、反射炉をつくり上げた江川太郎左衛門の住まいである江川邸へ向かう。重要文化財の代官屋敷は重厚な構えで存在していた。主屋土間から見上げる小屋裏は、たくさんの桁・貫が組み込まれ圧巻である。

ペダルをこぎ西へ向かい北条政子の産湯に使われたという井戸を覗きこみ、狭い道をたどり願成就院へと着く。仏師運慶が若き日、東国へ下向し

ていた折に作製したお像を拝見できる。最近重文から国宝になった阿彌陀如来座像・毘沙門天立象と、二童子を従えた不動明王である。躍動感あふれかつ精緻な造形で見者を圧倒する。何度訪れても感嘆させられる見事な仏様である。

温泉街の北端に三養荘がある。岩崎弥太郎の孫の別邸としてつくられ、のちに村野藤吾の設計によりととのえられた。本館と別館の前に広がるお庭に入ると、現代の数寄屋である「宿木」が、梅を配した芝庭に優美な姿でたたずんでいる。そのほか一連の「桐壺」・「藤裏葉」を外からだけではあるが見ることができる。新館に戻り、広々とした玄関から離れ形式の中、長い廊下を経て、一番奥にある露天風呂を持つ浴場で汗を流す。本

館の屋根が重なりその先に伊豆の山並みが望まれる。本来は宿泊の上、ゆったりとしたところではあるが、諸般ままならず玄関を出る。入口脇にある、これも村野の設計による円形の「ラウンジ 葵」で、珈琲をいただき今日一日に感謝する。

所在地・問合せ:
葦山反射炉 | 伊豆の国市中字鳴滝入268
TEL 055-949-3450
江川邸 | 伊豆の国市葦山1番地
TEL 055-940-2200
願成就院 | 伊豆の国市寺家83-1
TEL 055-949-7676
三養荘 | 伊豆の国市まのの上270
TEL 055-947-1111



山田正博 | 建築計画工房

東海支部役員会報告

今回の役員会では、JIA 東海住宅建築賞2015、JIA 東海支部設計競技、建築家フェスティバル2015、伊東豊雄氏セミナーなど多数の支部事業が取り上げられました。まさにイベントの秋まっさかりといった状況でしょうか。予算をやりくりし、皆さんで手間を惜しまず活動されているのが肌で感じられます。このような具体的な事業を通じ、JIAが社会に貢献し、市民の皆さんに理解されていくのだと思います。支部の役員としても気が引き締まる思いです。



中西修一 | shu建築設計事務所

日時：2015年10月30日（金）16：00～18：00
場所：昭和ビル5階 JIA 東海支部会議室
出席者：支部長、本部理事2名、幹事10名、監査2名、オブザーバー6名、欠席者1名

1. 支部長挨拶

11月のJIA 東海支部大会へのご参加をよろしくお願ひしたい。

2. 報告事項

(1) 本部報告

- ① 第230回理事会報告（鈴木利）
- ② 第2回アクションプラン特別委員会（10/6）（澤村）
- ③ 第6回本部公益事業委員会（10/20）（鈴木利）
- ④ 本部CPD評議会（10/28）（塚本）

(2) 支部報告

- ① 第6回 東海支部CPD評議会（10/2）（塚本）
- ② 第3回JIA 東海住宅建築賞2015（10/10）（吉元）
10/10表彰式、大賞受賞記念講演会、シンポジウムを開催。
参加者 117名（会員16名、一般48名、学生53名）
- ③ JIA 東海支部大会2015実行委員会（10/19）（谷村）
支部大会登録状況を報告。各地域会で動員をお願いしたい。
- ④ 東海支部資格制度委員会（10/21）（藤巻）
会員集会37名、講習会33名の参加。
- ⑤ 第32回JIA 東海支部設計競技（10/24）（矢田）
 - ・ 2次審査選出者報告。応募総数は32点と例年より少なかった。11/14、2次公開審査会。
 - ・ 予算案（修正版）提出。主な修正事項：賞金増額（対象を銀賞まで増やしたため）
 - ・ 5年間賞金なしでやったが応募件数が激減し、昨年度より賞金を復活させている。賞金のあるコンペが激増している状況も無視できない。委員会としてはこの方針で来年も継続したい。（矢田・水野）
 - ・ 賞金を出す以上、ある程度のクオリティを求め、該当者なしなども考慮に入れるべき。（車戸）

(3) 各地域会からの報告

各地域会長から報告があった。

3. 議事

(1) 審議事項

- ① 入会申込書 ジュニア会員「西郷悦代」（鈴木利）承認
- ② 事業報告書 子どもの建築学校委員会「建築家大会シンポジウム」（鈴木賢）承認

- ③ 事業計画書 子どもの建築学校委員会「建築家フェスティバル2015」（鈴木賢）承認
- ・ 主幹・愛知地域会事業委員会、共催・子どもの建築学校委員会の事業である。
- ・ ダンボールカードは愛知地域会で管理し、支部・支部内地域会に貸出可とする。
- ④ アーキテクト1月号「新年広告」について（牧）承認
- ⑤ 後援名義使用許可（一社）日本コンストラクション・マネジメント協会
2015年度第2回CM講演会「東海地区のCM事例紹介（予定）（11/26）」（久保田）承認
- ⑥ 後援名義使用許可（一財）東海建築文化センター
「開発許可制度研修会（2/24、29）」（久保田）承認

(2) 協議事項

- ① JIAフレッシュマンセミナー・神戸2015について（久保田）
 - ・ 会場が京都から神戸に変更。対象者は入会3年以内の正会員。枠は支部で2名以内。
 - ・ 支部で交通費5,000円／人を負担する。その他の負担は地域会裁量とする。
本部からは5,000円の助成あり。
- ② フェロー会員選考について（谷村）
フェロー会員を各地域から推薦する。（支部4名程度が目標）本部受付は12月末まで。
- ③ 「東海支部 運営規則」について（見寺）
慶弔規則を手直したものを提示。→審議に挙げ、承認。

(3) その他

- ① 伊東豊雄氏セミナーについて（11/27）（久保田）
- ② 支部事業における委員選任について（久保田）
～会員外の委員の扱いについて協議
- ・ 事業関連の委員会では会員外の委員を認める。（常置委員会は正会員のみのみ。）
- ・ 発言を認めるが委員長裁量で適宜コントロールする。オブザーバーとして扱うかどうかは支部長、幹事長で検討する。
- ・ 委員長は正会員とし、支部から委員長に委嘱状を出す。委員の委嘱状は出さない。
- ③ 国土交通省中部地方整備局「災害対策委員会名簿開示等」への回答について（久保田）

対応は東海支部を窓口とする。必要に応じて支部より各地域会に連絡し対応する。

(4) 監査所見

[山田監査]

次期体制を迎えるにあたりアクションプラン特別委員会で前年度より目標を決めるのは良いことである。3期務めた芦原会長の掲げた会員資格要件があと一息だったのが少し残念

[中村監査]

国際交流委員会が使っている基金の使途の中身が曖昧であったが、今回、はじめてARCASIAの報告が出てきた。こうした報告とセットで、海外で仕事をしたい人へのアドバイスもあると良い。今後も海外交流基金の使途に注視していきたい。

2016年度東海支部役員選挙についての報告

2015年11月20日
東海支部選挙管理委員会委員長 福田 一豊

2016年度東海支部役員選挙について、11月19日に立候補を締め切り、11月20日に第2回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は支部役員選出規約に定める定数と同数であり、推薦立候補届出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。
当選人は下記の通りです。

【幹事】

●静岡地域会

大瀧正也 (聖建築設計事務所)
江川静男 (ヴァイスプランニング一級建築士設計事務所)

●愛知地域会

久保田英之 (久保田英之建築研究所) ○
澤村喜久夫 (伊藤建築設計事務所)
高嶋繁男 (黒川建築事務所) ○
矢田義典 (矢田義典設計室) ○
吉元 学 (ワーク・キューブ) ○

●岐阜地域会

長尾英樹 (Meet's設計工房)
西川光広 (シーテック21)

●三重地域会

奥野美樹 (奥野建築事務所) ○
豊田由紀美 (Y's建築設計事務所)

【監査】

鳥居久保 (針谷建築事務所)
服部 滋 (三共建築設計事務所)

注：敬称略、○印は再任

2016年度東海支部愛知地域会役員選挙についての報告

2015年11月20日
愛知地域会選挙管理委員会委員長 森川 礼

2016年度東海支部愛知地域会役員選挙について、11月19日に立候補を締め切り、11月20日に第2回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は地域会長・副地域会長候補(支部幹事兼任)5名と、地域会監査2名の定数と同数であり、推薦立候補届出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。
当選人は下記の通りです。

【地域会長・副地域会長候補】(支部幹事兼任)

久保田英之 (久保田英之建築研究所) ○
高嶋繁男 (黒川建築事務所) ○
澤村喜久夫 (伊藤建築設計事務所)
矢田義典 (矢田義典設計室) ○
吉元 学 (ワーク・キューブ) ○

【地域会監査】

小田義彦 (伊藤建築設計事務所) ○
谷村 茂 (アール・アンド・エス設計工房)

注：敬称略、○印は再任

※静岡地域会・岐阜地域会・三重地域会の幹事は選挙を行わず選出されていますので、選出経過は東海支部役員選挙報告に代えさせていただきます。

Bulletin Board

JIA三重主催

建築ラリー 2016

1月末より、開催日はすべて土日

◆建築ウォッチング

□「建築家と松阪を歩こう」

日時：1月23日(土)10:00～16:00 参加料：2,000円(昼食付)
松阪商人の館、旧長谷川邸、見庵(昼食)、御城番屋敷、本居宣長旧宅ほか

□「建築家と四日市を歩こう」

日時：1月30日(土)15:00～20:00 参加料：4,000円
潮吹き防波堤、未広橋梁(重文)、コンビナート夜景クルーズ

□「建築家と伊勢を歩こう」※五十嵐太郎氏同行

日時：2月7日(日)10:30～16:00 参加料：2,000円(昼食付)
伊勢神宮外宮、せんぐう館、ボンヴィヴァン(昼食)、旧山田郵便局電話分室、山田館ほか

◆建築文化講演会

「地域や地方でこそ感じる建築・建築家の役割」

日時：2月6日(土)13:00～14:20
(アスト津 アストプラザ4F アストホール)
講師：五十嵐太郎(建築史家、建築評論家、東北大学大学院教授)

◆建築文化シンポジウム

「いざというときの建築・建築家」

日時：2月6日(土)14:30～17:20
(アスト津 アストプラザ4F アストホール)
コーディネーター：五十嵐太郎
パネリスト：稲垣 司(三重県防災対策部長)、辺見美津男(JIA副会長・東北支部長)、森岡茂夫(JIA和歌山災害対策委員長・JIA神奈川元代表)、中西修一(JIA東海支部三重地域会 会長)

新年あけましておめでとうございます 2016年

<p>(株) 石井建築事務所</p> <p>代表取締役社長 鈴木俊之</p> <p>熱海市田原本町 3-1 熱海魚熊ビル 2F TEL 0557-82-4171 FAX 0557-82-4174</p>	<p>企業組合 針谷建築事務所</p> <p>理事長 鳥居久保 相談役 高田雅司</p> <p>静岡市駿河区小黒 3-6-9 TEL 054-281-1155 FAX 054-282-5502</p>	<p>(株) 石本建築事務所 名古屋支所</p> <p>取締役支所長 植野 収</p> <p>名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル TEL 052-263-1821 FAX 052-264-1990</p>
<p>(株) 伊藤建築設計事務所</p> <p>代表取締役会長 森口雅文 代表取締役社長 小田義彦</p> <p>名古屋市中区丸の内 1-15-15 桜通ビル TEL 052-222-8611 FAX 052-222-1971</p>	<p>(株) 浦野設計</p> <p>代表取締役社長 浦野廣高 取締役会長 浦野三男</p> <p>名古屋市西区八筋町 90 TEL 052-503-1211 FAX 052-503-1213</p>	<p>久保田英之建築研究所</p> <p>久保田英之</p> <p>名古屋市東区東大曾根町 29-11 共栄ビル 5C TEL 052-979-0755 FAX 052-979-0756</p>
<p>(株) 黒川建築事務所</p> <p>代表取締役 黒川喜洋彦</p> <p>名古屋市昭和区鶴舞 2-10-5 TEL 052-882-0281 FAX 052-871-1884</p>	<p>光崎敏正建築創作所</p> <p>光崎敏正</p> <p>名古屋市千種区四ツ谷通 1-7 ビレッジ四ツ谷 2F TEL 052-781-5523 FAX 052-781-5524</p>	<p>(資) 三共建築設計事務所</p> <p>服部 滋</p> <p>名古屋市中区伊勢山 1-1-1 TEL 052-321-9591 FAX 052-321-9594</p>
<p>(株) 三和建築事務所</p> <p>見寺昭彦</p> <p>名古屋市港区港栄 4-5-5 TEL 052-661-2211 FAX 052-661-2247</p>	<p>(株) 田中総合設計</p> <p>代表取締役会長 佐藤東亜男 代表取締役社長 近藤 眞二</p> <p>名古屋市中区丸の内 1-8-39 TEL 052-211-4035 FAX 052-201-9285</p>	<p>中日総合技術開発(株)</p> <p>代表取締役 葉 錦</p> <p>名古屋市熱田区六野 1-2-21 the LMC Tower2303号 TEL 052-871-6601 FAX 052-871-6602</p>
<p>(株) 都市造形研究所</p> <p>代表取締役 伊井 伸</p> <p>名古屋市中区丸の内 3-6-27 TEL 052-972-6831 FAX 052-972-6832</p>	<p>(株) 中建築設計事務所</p> <p>取締役会長 森川 礼 代表取締役 廣瀬高保</p> <p>名古屋市中区新栄 1-27-27 広瀬ビル TEL 052-262-4411 FAX 052-262-4414</p>	<p>(株) ヤスウラ設計</p> <p>代表取締役 水野豊秋</p> <p>名古屋市中区新栄 2-35-6 TEL 052-241-7211 FAX 052-241-7333</p>
<p>(株) ワーク・キューブ</p> <p>桑原雅明 吉元 学 平野恵津奈</p> <p>名古屋市昭和区福江 1-7-2 TEL 052-872-0632 FAX 052-872-0633</p>	<p>(株) 車戸建築事務所</p> <p>代表取締役 車戸慎夫</p> <p>岐阜県大垣市鶴見町 73-3 TEL 0584-78-8311 FAX 0584-73-3401</p>	<p>shu建築設計事務所</p> <p>代表 中西修一</p> <p>三重県多気郡明和町明星 1754-3 TEL 0596-52-6400 FAX 0596-52-6439</p>
<p>(株) 中村建築設計事務所</p> <p>代表取締役 中村 久</p> <p>三重県員弁郡東員町北大社 1325-9 TEL 0594-76-2102 FAX 0594-76-8717</p>	<p>サーマエンジニアリング(株)</p> <p>代表取締役 福田哲三</p> <p>名古屋市中区丸の内 3-2-29 TEL 052-955-1455 FAX 052-971-1398</p>	<p>ホクセイ(株)</p> <p>代表取締役 山下三男</p> <p>三重県桑名市大字江場 3丁目 118-26 TEL 0594-21-9660 FAX 0594-21-9676</p>

「健康経営」と“モノづくり”

法人協力会通信②

<静岡>

古川重昭 | 株式会社岡村製作所 中部支社 営業推進役



最近、国産初のジェット旅客機「MRJ」が中部より発進、「VW」の排ガス不正などと、モノづくりについて考えさせる話題が続出しています。

さて、当社のモノづくりの“DNA”は、「ミカサ」にあります。戦中航空機「屠竜」製造の技術者が、戦後FFオートマチック車「ミカサ」を製造。本年、その「ミカサ」のトルクコンバーター式オートマチック・トランスミッションが、日本機械学会の2015年「機械遺産」に認証されました。トルコンは1951年に日本で初めて開発され、現在も国内外多数の産業車両で活躍しています。高い技術力による当社のモノづくりは、創業以来の精神「良い品は結局おトクです」を基に、本年創業70周年を迎えました。現在は「空間に夢を

創ります」をキャッチコピーに、建築付帯の間仕切などの建材、オフィス家具、施設環具他の製造・販売を展開しています。

当社は毎年11月に新製品発表会を開催していますが、本年は「働き方を変える。組織が変わる。“It's my style”」がテーマです。いわゆるオフィスワークは「知的創造活動」の推進から、今回はそれを発展させ、座り姿勢を基本に立ち姿勢を積極的に取り入れる“+ Standing”の新しいスタイルの働き方を



デスクを自分の働きやすいスタイルに！

椅子の開発にも携わる弊社が提案。昨今「座り過ぎ」は足や腰などの血行障害のほか、さまざまな健康リスクが指摘されていることに着目しました。「座る」+「立つ」のメリットは①作業効率アップ、②コミュニケーション活性化、③安全・安心、④健康増進で、これら、特に④により、個人が健康で活き活きとした仕事ができ、組織も変えうるのです。左様に今、経営上の環境整備は“コスト”ではなく“投資”と言われる所以です。家具づくりも建築の一部。建築計画にも建物内外の“健康”を志向した空間づくりが拡がればと、期待しています。

●株式会社岡村製作所 中部支社 静岡
〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー7階
TEL 054-252-6101
URL <http://www.okamura.co.jp>

編集後記

●新聞を取らなくなって久しい。インターネットのニュースばかり見るようになってしまった。これではいけないと最近では街頭で販売している「BIG ISSUY」や定期購読が中心の報道写真雑誌「DAYS JAPAN」、知人が発行している名古屋発の雑誌「棲」などからも情報を得ている。インターネット上にある無数の情報を拾い上げるのは信憑性などに不安が残り、疲れてしまう。「情報」はデジタルな信号だけではなく、アナログで顔が見えるものを自分で探しだすことこそ大切だと思う。「ARCHITECT」はいかがでしょう。紙でできた貴重な会員の顔が見える「物」になっていますか？記事の中で役員選挙の報告があり、役員改選の時期を迎えています。編集を預かるブリテン・会報委員会では参加していただける委員を募集致しま

す。組織の中で顔を見せて情報を交換しませんか。(吉元 学)

●明けましておめでとうございます。今号の「だれもが知ってる建築史のはなし」では「計る」がテーマに取り上げられていました。私は昨年訪れたイタリアローマのコロッセオを思い返しながら拝読しました。数千年の時を経て人々を魅了してやまないこの建造物。当時の建築技術を結集、全体が円筒形で力学的にも安定していたために今日まで残ったとされています。石の積み上げ方についても先進的な技術の発達があったのです。「過去に学ばずして未来はない」。もっともだと言わざるを得ない建造物の一つです。さて、話を日本に戻しましょう。だんだん季節の移ろいを感じにくくなってきました。私たちは変わりゆく日本の風土に合わせて生活していく必要があります。建築のあり方について見直す良いきっかけとなるかもしれません。「計る」ことだけに固執せず、まずは時代や環境の大き

な流れに飲み込まれないよう、広い視野で物事を考えていきたいと思っています。

(石川英樹)

ARCHITECT

第 328 号

発行日 2016.1.1 (毎月1回発行)

定 価 380 円 (税込み)

発行責任者 石田 壽

編集責任者 牧ヒデアキ

編 集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>